

広島  
の  
芸  
術  
家  
の  
為  
に

夢  
を  
い  
だ  
い  
た  
人  
生

ピ  
カ  
ソ  
画  
房

佐  
渡  
久  
士

池  
田  
三  
千  
恵

(旧姓佐渡)



## 目次

はじめに	11
戦前の歩み	12
ピカソ画房の誕生	14
新たな出発	17
猪熊弦一郎の「SLを運転した話」よりの抜粋	22
第二次世界大戦が始まる産業奨励館（現在の原爆ドーム）の思い出	24
父が親しく会っていた方達	34
網島家と日本画家和高節二画伯と父のこと	38
和高伸二氏からの書簡の抜粋	51
芸術関係以外：戦前町内で行われていたこと	54
原爆のこと	55
（昭和20年8月6日の忘れることの出来ない原爆投下の日）	57
戦後の歩み	60
思い出した二つの大きな火事	64
松本滝蔵氏と衆議院選挙の思い出	66
夢を追い続けて	68
父の死	76
中西利雄画伯と父の思い出	80
高村光太郎先生と父の思い出	82
三岸好太郎からの書簡	84
小田興治氏の回想	86
ピカソ画房 七十七年史年表	94
ピカソ画房を継いで……花澤憲治	98
あとがき	102



昭和40年頃 イクナガ写場にて撮影



戦前昭和10～11年頃 流川店舗前

## はじめに

広島で最初に自分の夢であった画材店をつくり、広島画家達の為に画家の作品が入選するようにと、作品を持って上京を重ね、当時活躍していた著名な画家を広島に招いて、講習会や写生会を催し、広島美術界の発展を願いつづけた。ピカソ画房創業者 佐渡久士（久男） 〓 その75年の生涯を、母が書き残したものと娘としての記憶をたどりながらまとめました。

現在も続いている「ピカソ画房」のことを一人でも多くの方々に知って頂き、末永く広島美術界が先代の志しを継ぎ、皆様と共に発展することを願っております。

## 戦前の歩み

父は、広島市の場町92番屋敷の広島番傘製造卸小売業佐渡亀蔵の五男として、明治40年8月15日に生まれました。猿猴川の側で、家の下は川、家の横の階段をトントントンとおりて川に出て、多分、子どもの時は皆でよく遊んでいたと思います。太田川から七つの川に別れた一つで、水がきれいな川でした。兄弟は五男五女の十人。後に水彩画家中西利雄画伯の妻となった富江は五女でした。

広島県立商業卒業後、東京に出て税関の下請会社に入社し、外国その他の入港船の商品検査係をしながら、明治大学商学部専門部と川端美術絵画研究所に通い、油絵とデッサンの勉強をしました。

自分の中では、絵描きになりたかったようです。

父に聞いた話では、お金もなく、橋の下や倉庫のある所で寝て過ごした日もあったそうです。

その当時に、何を食べていたのかは教えてくれませんでした。



三食たべることができず、一食の日もあったと聞いています。

夢を追いかけて上京したものの、自分の夢とはほど遠く、苦しい生活が続いたようで、知り合いも全くいない生活の中、一人で頑張るしかなかったのでしょう。

自分の夢を貫くという事は自分だけの力だけではなく、他の人の力も借りて、一步一步前進していくしかないのだと思います。

今も夢に向かって若い力を出して、一生懸命進んでいこうとしている人は多く、同じだと思ふのです。昔も今も、日本人の心は変わっていないと思うのは、私だけでしょうか。

結局、東京の生活での無理がたたり、病気になる、広島に帰って来ました。もともと父は身体が弱かったこともあり、兵隊には行けませんでした。呼び出されても、いつも帰って来ていました。

昭和博覧会の前に広島市役所に入りました。その頃、画家の山路商氏が満州国から帰国されて、氏を中心とするグループに加わり、絵画研究所を開きました。父は人と接するのが大好きな人で、皆が集まって来ては、相談を受けたりしていたのだと思います。

商業部出という事で、グループの勧めで、不承不承役所勤めをしながら自ら絵を描き、材料部の世話をすることになりました。



広島市役所時代

その当時売り上げ金がたまると、グループで夜を徹して酒を飲み、金がなくなるまで絵画論に激をとばし語り合っていたそうです。芸術家を愛した父は、皆で楽しく、熱く語り合う場が欲しかったのだと思います。

私は今回父が、昭和5年第15回広島県美術展覧会に入選した事を初めて知りました。画題は「風景」で父が23歳の時でした。絵が好きで絵描きになることを夢見た父の、最初で最後の出品だったのでしよう。一度入選したので、後は人の為に役に立ちたいと思ったか、思わなかったか、今となっては定かではありません。絵を描く仲間に勧められたのかもしれませんが、父は皆様の為に画材販売の道へ進んだのかもしれない。

的場町の自宅の店の一隅に画材を置き、市役所勤めの給料が入ると、東京文房堂へ仕入れに出かけていたそうです。画家の世話もしていたらしく、よく家に連れて来たものだと義母が言っていたと母から聞いたことがあります。こんな生活を3年位したようです。

## ピカソ画房の誕生

市役所を退職し、昭和7年2月7日広島市流川町に幅一間、奥行二間の2坪の店先を借り、画家グループの夢である「ピ



昭和10年頃 流川店舗前の父

カソ画房」を開店しました。24歳の時でした。実妹の富江に手伝ってもらっていて、店は何時も広島当時の絵を描く若者のたまり場だったそうです。父も美男子、叔母も美女でした。

三岸好太郎画伯とも大変親しくして頂き、頂いたお手紙が画伯の絶筆となりました。父はその封書を大切に保管し、時折出しては涙していたものでした。

多分二人は意見が合い、一番分り合える存在だったのかもしれない。現在、北海道の三岸美術館に、この手紙が展示されています。(註・84頁に掲載)

「蝶と貝殻」を描いた美しいスケッチブックも父は頂いていて、大切にしています。(註・85頁に掲載)

色のきれいな、爽やかな絵で、私も大好きでした。ふり返ってみると、私自身、これを何度も見つめては、絵の道へ進む気持ちを固めていったように思います。

昭和10年3月小林千鶴子と結婚し、父の実家である的場の家から小さな店に二人は通っていました。その頃、2坪の狭い店は髪の毛の長いボサボサ頭でうす汚



1932 (昭和7)年第1回広美展のラベル? 後援・中国新聞社



昭和10～11年頃 流川店舗前 佐渡久士の妹富江

れた絵描き達が毎日遊びに来ていて、閉店したあと父は画家達を連れて12時前後まで飲んだり、話したりしていました。

絵描きになりたかった父の、自分の夢であった絵に対しての熱い思いが、その当時から少しずつ変化していったのかも知れません。同じ夢を持つ同志と激をとばし合う事で、心の中を癒していたのでしょうか。母千鶴子は、木工所をしていた父小林禎吉・トヨの長女として生まれ、二人の弟（博三・弘三）がいました。佐伯郡廿日市で山中高女を卒業しました。



昭和7年広島洋画協会忘年会（前列左から、内山市郎、朝井清、田中万吉、山路商、末川凡夫人、後列左から大木茂、吉岡一、大西秀吉、辻潔、荒井不可志、阪井谷松太郎、福井芳郎）



昭和7年頃広島洋画研究所にて（父、阪井谷松太郎、福井芳郎）



昭和6年頃写真実派連盟第2回展（左から、野田武夫、穂田伏見、父、船田玉樹、山路商、広田稔、檜山武夫、一人おいて、福井芳郎）

## 新たな出発

昭和10年7月、現在地の広島市堀川町25番地に、かなり広い2階建ての店舗を借りて、そこに的場から二人は引越しました。父は借金をして、商品を東京文房堂大阪支店で仕入れていました。

借金も多いので、その頃から商売にも力を入れる一方で、東京から友人の画家が来ると我が家に半年も居たり、ということもありました。

両親は、画学生の世話も心からし、東京芸大の生徒が「広島のピカソへ行けば泊めてくれるし、汽車賃、小遣いが無いと言えば、それも出してくれる」と誰に聞いたのか学生達が次々に来たので、母は大変だったようです。

父と結婚したことで、全然知らない世界の中で、よく黙って我慢して来たと思います。母も裕福な家庭



昭和10年頃の店舗

に育ったわけではなく、耐える事には慣れていたのかも知れませんが、  
 当時は、現在のように沢山の商品は無かったと思いますが、絵描きが必要な最小限度の商品を持ち帰るか、送るかしていたのだと思います。  
 お金の無い生活で、画家達が来ては泊まって大変だったのに、よく母は何も言わず世話をしていたと感心しています。

店には、水彩画家、春日部たくす画伯も来られて、広島地方の水彩画家を志す人達を指導されました。又、水彩画の講習会等で、中西利雄画伯達の後押しにより、画材を売ることに専念するようになりました。



昭和9年頃絵を搬出する(左)福井芳郎と(右)山路商



昭和9年8月夏期講習会 県師範学校アトリエ



展覧会での中西利雄

中西利雄画伯を囲んで楽しく語り、明日の写生会を約束したり、忙しくも楽しい頃だったようです。

水彩画を描く方々には小学校の先生方が多く、中西画伯宅へ毎年のように、その先生方の絵を自費で持参し、一人でも多く水彩画会に入選させたい為に、東京へよく行きました。

この頃、諸先生方の努力で、広島は水彩王国といわれる言葉が頂いたそうです。

油絵の方では、東光会会員の佐藤一章画伯も広島に来られるたびに、我が家を宿にして親しくしていました。

戦争が激しくなり、従軍画家として宇品港より出発される時も、我が家に泊まり、出かけられたそうです。絵を描いていた人達も皆、戦地に行く時、「ピカソ画房」に寄って行かれました。

「優秀な青年達が、行ってきますと言いつつ残して出かけて行く時には、辛い思いがよぎり涙が止まらなかった」と母は言っていました。



昭和8年8月朝光会夏期油絵講習会集合写真前2列目中央右が父

この頃から、広島画壇も、油絵・水彩・日本画と活発に活動し、絵画講習会も盛んになりました。父も東京の諸画伯との交流も多く、商売の方にも力を入れ活躍したものでした。

昭和11年4月長女三千恵誕生、父は男の子が欲しかったようです。同年12月には父の妹富江と中西利雄画伯が結婚しました。

昭和12年、藤田嗣治画伯夫妻が来広された時も、画材は一切持参されず、店を可愛がって良く買って頂きました。東京から名のある画伯・画家達もピカソを愛しくして下さいました。

それは、父が自分の夢であった絵画・芸術家を大切にし、母も一緒に頑張り通して来たからだと思います。東京に行くと、画家達の家を訪ねて、色々話し、広島へ来て下さるようお願いしてきていたのかも知れません。

8月、広島蒼原会の招きで、猪熊弦一郎画伯・小磯良平画伯・中西利雄画伯が来られ、講習会が産業奨励館で開かれました。その時の講習生の一人で、鉄道の機関士をしていた太田忠氏は、後に新制作派協会会員になりました。

父が太田忠氏に「一度乗りたかった機関車に乗せてもらいたい」との猪熊画伯・小磯画伯・中西画伯三人の願いを聞き入れてもらい、実現する事が出来ました。

三人共に、乗りたかった機関車に乗せてもらい、自分達が機関士になった気分になり、子供の様に喜び、

はしゃぎ、嬉しそうだったと話していました。

中西画伯は、自分のアトリエ一面にレールを引き、音楽を聴きながら汽車を走らせ、楽しそうに一人で遊んでいたとの事です。だから、誰よりも実物の機関車に乗りたかったのかもしれない。子供心に忘れられない、私の大切な叔父の思い出です。



1934(昭和9)年12月 広島蒼原会講習会・中央中西利雄  
前列左名柄正之



1934(昭和9)年9月広島蒼原会写生会・宮島紅葉谷  
左より名柄正之・春日部たすく・坂江重雄・岩岡貞美・内山一郎



1935(昭和10)年頃 アトリエで遊ぶ中西利雄



SL 機関士画家 太田 忠 写真右

戦前、利さん（中西利雄）と小磯（良平）君と私の三人が講師で、広島市で絵の講習会を開いた事がある。当時の広島は、実に静かな美しい街であった。

河の兩岸には、沢山の牡蠣船が浮かび、うまい料理を食べさせた。講習生も一人一人が実に素朴で、毎日モデルを使つての日々が愉快で楽しいものだった。講習会が無事終了の日が近づいた時、利さんは、とんでもなく面白いアイデアを考えた。講習会の最初から何くれとなく世話をしてくれていたのが太田忠さんであった。当時は忠さんも講習生の一員であったが（忠さんはそのころ広島駅きつてのSLの名運転士であった）、この忠さんに利さんが依頼して我等をSLに乗せてもらうことになった。

利さんはもとより忠さんも私達も大満足であった。

当日、私達三人はSL運転の作業服、つまりナツパ服を着せられた。帽子もナツパ帽である。客車の方には講習生一同が同乗し、私達三人に忠さんの四人は機関車に乗り込んだ。広島駅のプラットホームからである。私は汽笛の係りで、利さんと良平君は、石炭をシャベルでボイラーに入れる、つまり機関係であった。これで万事素人列車は準備完了、出発OKであった。忠さんの「発車オーライ」の合図で復唱し、汽笛一声、ピートをやるところで汽笛の紐を引くも、これは実に驚いたことに力なくヒューとしか鳴らなかつた。

意気天をつく出発どころではなかつたが、SLの方はシュッシュッと力一杯に無事出発した。「汽笛一声広島を・・・」である。我等のうれしがりようつたらなかつた。忠さんの指導で、利さんと良平さんが次々に石炭をボイラーの中に小さなシャベルで投げ入れるのであるが、仲々うまく出来るものではない。利さんはまるでプロフェッショナルな機関士然とした顔つきで、本當にうれしうそうであった。無事呉駅に到着。それからまた、広島駅まで引き返すのであったが、忠さんの妙技で広島駅のプラットホームのストップラインに長い列車がピタリと停車したのは利さんはじめ、良平君も私も驚嘆してしまった。



中西 利雄 写真右



左より小磯良平・猪熊弦一郎・太田 忠・中西利雄  
1937(昭和12)年8月

### 「デッサンの歌」

作詞・編曲 中西利雄



えの ぬけと けし はアノ いつ 飾 なき いけません ネエ



う 訂た ゆまず かくこと がアノ いちばんだいじな こと です



あぶらえも すいさいも デッサンを しっかりと



ぬきしなけりや いけません ソリ ほんとの こと です ねみな ね

父は、北は大朝町、東は呉方面、西は大竹町方面まで、自転車で荷台をつけて、50号〜100号位のキャンバスを積んで、風に吹き飛ばされたりして、何度も危険な目に合いながらも運んでいたという話をしました。当時物を運ぶ方法は、荷車しかなかったのです。

言葉少ない父で自分がつらくても何も言わず、皆に心配をかけたくないという自分自身の心との葛藤があったと思います。

夢に向い楽しみながら、父は父なりに、母は母なりに、二人で力を合わせて、一日一日を大切に過ごしていったのでしよう。

昭和13年10月、次女匡子誕生

昭和16年3月、三女紀久代誕生

昭和18年1月、四女久子誕生

残念なことに、父の願った男の子は生まれず、四人共女の子でした。

## 第二次世界大戦が始まる

昭和16年（1941年）あの太平洋戦争の始まった12月8日早朝、画友の山路商画伯が特高に連行されました。それから次々と、絵を描く画友、詩人等、芸術にたずさわっていて、店に出入りする人達が連行

されたらしいという知らせを受けました。

二、三日後、我が家が反戦思想運動の中心だろうとの事で、父も連行されて行きました。連行前、時間をもらい、最後となるかもしれないと、父母は水盃で別れをしたそうです。

芸術家を愛し続けた父はつらい気持ちで、何を考えて一日一日を過ごしていたのでしょうか。

二ヶ月位で疑いも晴れて家に帰されましたが、身体はかなり弱り、その後肋膜炎になり床に付いてしまいました。二ヶ月の間ひどい仕打ちにあい責め立てられたようですが、ひと言も話さず、ただ黙り通したようです。母は父の姿を見て涙がこぼれたと言っていました。

皆の為、芸術を愛する為に、何も分からぬ者に話しても無駄だと父が心に決めていたということを母から聞きました。

芸術を愛する者は、全部日本の敵だと政府は捉えたのでしよう。軍国主義の日本の議員、軍部の力が大きくて、反対する勇氣のある政治家は、無にひとしかつたのかも知れません。

芸術的なことをする人は、その当時、皆、非国民と言われており、口を閉ざし絶え忍んで毎日を過ごし、身を隠した時期でした。

戦争が長くなると、だんだん商品の出回りも悪化して、我々の様な地方の小さな画材店は商品が入らず大変でした。

そのうちに絵画材料等も配給制になり、どうすることも出来なく



店舗上部中央看板がアポロ像に変わる



昭和13年夏店の前で

なりました。

又、父の連行中も常に店の前に見え隠れした特高が店を遠まきに見張っていると、隣の旅館の軍用旅館将校専用の仲居主の知人が教えてくれたりもしました。

すると母は特高らしき人物を見かけると、画家達に「今は来ては駄目」「今は良い」と子どもを抱いて、子守する格好でその日は朝から晩まで、家の向側の商家の前を行ったり来たりして合図をし、画家達を守ったものだと言っていました。

その頃のことを思い起こすと、父は連行されて不在だし、持って行き場のない、やりようの無い気持ちだったと母は言っていました。

こんなこともありました。

特高の中尉三人が、ある日つかつかと店に入り、店内を見渡して、ピカソの裸婦の複製画（ハガキ二枚位の寸法）が壁に掛けてあるのを見つけ、母は大変叱られたそうです。

でも母は強い人で負けてはいません。「何が不潔な絵ですか。貴男方の目が、いやな見方をしたり、考えたりするから、いやらしく見えるのでしょうか。貴男方は奥様の裸も、もう見ないのでしょね」と言い返したら、益々大声を出して叱られ、抱いていた赤ちゃんが泣き出しましたが、母はゲラゲラとバカ笑いをしてやったそうです。

結局、彼等は「この絵は焼却せよ」と言い、母は「ハイ」と返事はしたものの、「ここに掛けておきますから、何時でも見に来て下さい。欲しければ、差し上げましょうか」と言い返したそうですが、誰も手

を出さなかったそうです。

あの頃の将校は、皆、教育をその様に受けて来たのかと母は言っていました。

人間であり、人の子の父親であれば、自分の親のこと、妻のこと、この絵を見ながら、ふと思いついたと思います。それが人として自然なことだと思おうのですが。

父が釈放され帰宅して間もなく、特高の命令で、「店の看板が悪い、ピカソと交流があるのではないか」と言われ、母は、「バカも休み休み言って下さい」と言い返したそうですが、父はあきれ返す言葉も無く、一言も口を開かなかったそうです。

父は連れて行かれた時に、よほどひどい仕打ちを受けたのだと感じ、気の毒な気持ちでいっぱいだったと母は言います。

その看板というのは三人の裸婦立像のピカソの名画をそのまま拡大してあるもので、絵描き仲間の間では有名だったそうです。

「即時降ろして焼却せよ」との特高の命令で、仕方なく命令通りにしたそうです。

それから店名を「ピカソ画房」から「広美堂」と改名することになりました。

「ピカソ画房」から「広美堂」に変えたのは、戦争が激しくなり、横文字は英米語から来ている敵国語だとして、「カタカナ文字」は「ひらがな」か「漢字」で表わせとの命令があり、父も考えて広島の「広」と美術の「美」を取って、「広美堂」にしたようです。

その当時日本で画材を扱っていた店は、銀座画房（専門店）と田坂文房具店（兼業）の三店だったと母

は話してくれました。

看板を広美堂に変えてから、従軍画家として戦地へ行っていた佐藤一章画伯が一時帰国された時、ピカソの看板が無くなり広美堂と変わっていたので、経営者が変わったのかと恐る恐る覗いたら、父母が居たので驚かれ、今までの話をするの大変残念がられたと言っていました。

終戦後、元の場所へ戻って店を建てても、二度と父は戦前に親しまれた、ピカソの三人像を使用したはず、現在の「ピカソ画房」のみの看板に変えてしまいました。

三人の裸婦像のピカソの名画はゴム印にしました。

父が落ちて着いてから、包装紙等の図柄にして現在も使用されています。

戦争が激しくなると段々と商品の配給も少なくなり、聞くところによると、軍がほとんど使用していたそうです。

絵を描くことも厳しく、屋外に出て写生することも禁じられ、画家達も小さくなって、身を潜めた時代になり、どの画材店も、本当にあわれで生活に困っていました。

その頃、幸運にも、暁部隊の将校がたまたま出入りされ、絵画の話とか広島地方の話などしたのが縁で大変親しくなり、見るに見かねて泥絵具を納品する道を開いて下さったと母は喜びを隠すように話してくれました。

続いて、海軍兵学校や大竹海軍部等に納品を許されて、かろうじて生活をしていました。海軍に納品するといっても、彼等は何に使用していたのか、私としては疑問を感じて未だに理解出来ません。

その事について、母は何も教えてはくれませんでした。母も聞いていなかったのか、教えてもらえなかったのかと思います。

当時は、大きな陳列ケースの中は、何も入っていない空の状態でした。

絵具も自由にならず、当時の画家達はどのような生活をし、自分達の絵を描いていたのでしょうか。

絵描きにとっては絵具は大切な物で買える時に買い、誰にも分からぬように大切に隠していたのだと思います。自由に描ける時が来るまではと、心に決めて過ごされていたのでしょうか。

ふと思うのですが、戦争をしたのは日本だけではなく、世界の絵画を愛した人達はどうに過ごされていたのでしょうか。国によって違いはあるかと思いますが、芸術を愛した人達の生活は、日本と変わらなかったのでしょうか。

時を同じくした頃、男子に徴用をかけるとたびたび憲兵が言ってきた、やむなく父は安佐郡祇園町の大下女学校の絵画教師の話を頂き、教師となりました。

父から聞いた話では、絵だけでなくそろばんも教えていたと言っていました。

段々と女生徒も徴用され、軍需工場へ行ったり、田んぼの稲刈りに駆り出されたり、ほとんど教える時間は無かったようです。

可哀想な時代になったと、父は嘆き、校長と意見が合わず対立して、校長の教育方針に不信を持ち、遂に教師がいやになり辞めました。

父は生徒達の話を親身に聞いていたようで、学校を辞めてからも生徒や親・祖母達が野菜等を届けて下さり、何かと色々相談を受けていたそうです。

物がだんだん無くなって来た時だったので、私達は新鮮な野菜が食べられて本当に助かりました。

教員生活を辞めてから又々徴用問題が起きましたが、天体望遠鏡販売の権利を軍司令部より受けていた母の弟小林弘三が声をかけてくれ、店の一隅に五台位置くことにして、天体望遠鏡を軍に売るために、五師団司令部暁部隊（宇品）等へ毎日のように入入りしていたようです。

母は特高に連行される心配もなくなり、ホッとしたそうです。

もちろん、父は芸術を愛する夢は捨てていたわけではなく、今は時代が悪いのだと言っていたようです。

その時にこんなことがあったそうです。母が父から聞いた話です。

五師団司令部の希望により、父と義弟と二人で重い天体望遠鏡をやっと運び入れ、軍の展望台にかつぎ上げた時、そこへ軍の将校十人位が次々のぞきに来ました。

その時丁度空襲警報が鳴り出し、はるか向こうの空からアメリカ軍のB29が3機見えたときに、将校達は我先にと階段を駆け降り防空壕に逃げ込み、残った父と義弟二人は望遠鏡の方が気になり、横になり鏡脚を一生懸命に倒れないようにと持ち、B29が立ち去るまで守っていたとのことでした。

何事もなく済みましたが、生きた心地はしなかったと話していました。

家に帰って、軍人将校は自分の生命があんなに大切なのか、腰抜けなのか、我々二人が馬鹿なのかと、よく一杯飲むと話し、「やはり我々の負けじゃったのう」と笑っていましたが、あの時程、恐いと思ったことは無かった……と父は話していたそうです。

人間って、国の為にと国を守るべくいばっている将校でも、やはり自分が一番大切に（本音は死ぬのはいやで生きていたい）、国を守ると言うのは名目だけなのかと思ったそうです。

戦争も激しくなり、広島にも度々米軍のB29が来るようになって爆撃を受けたので、日本も大変な時が来たと感じ、昭和20年5月佐伯郡廿日市町の母の実家の工場の事務所を改造し、子供三人（妹達）と母の計四人で移りました。馬車で荷物を運んだと言っていました。

昭和20年4月長女の私は小学校三年生で、芸備線の備後西城に学童疎開をし、三年生から六年生までが組ごとに別々のお寺に寝起きする集団生活をしていました。

父は堀川町の家に残り、同年7月初め長女の私を疎開先へ連れに来て、かじかの鳴いている宿へ家族皆で泊り、私は友と別れて広島に帰りました。

戦争で一人残すのは可哀想と思う親心から、家族は一緒に行動する方が親として安心だし、生きるのも、死ぬのも一緒に考えたようで、連れて帰ることにしたそうです。

当時、都市部では食糧事情が逼迫し、軍人以外は皆飢えに苦しんでいましたが、疎開先でも田舎なのに、食べる物も何もかも、私達には全然とわいていい程ありませんでした。

父は、町内会の役員もしていたし自分の店のこともあり、一人堀川町に住んでいました。

夏休みになり、戦争もいよいよ激しくなってきた。時々父も廿日市に来て家族と過ごしました。物はなくても貧しい生活でも、笑い合えたひとときでもありました。

母の実家は小さな小川の側で、海も近く魚や貝は食べることが出来ました。

田舎なので、物資は配給でもまだのんびりとしていました。川に入って遊んだり、川エビを取ったり、沢蟹を追っかけたり、小魚を追いつめたりしていました。私が三歳の頃は、ウナギや鯉もいたのです。

芸術家・文学者等は、戦時の敵（非国民）とされ、昼間はどこに居るのか分からないようにして、夜になると、どこからともなく姿を現し、集まって話をしていたようで、父も店を閉めるわけにいかないと、一人で頑張っていました。夜に活動するのは、将校達が町中から消えていなくなるからです。

隣が旅館で、将校達も泊まつたりしていましたが、その時は、町中も静かに音もたてないような空気でした。人も通らぬ中、店の戸を少しだけ開けて、家の中に皆引っ込んで、兵隊達がいなくなつてから動き出したのです。

町内の人達も戦争が激しくなつて来たので、皆、子供を連れて田舎の方へ疎開したようです。

行く先のない人達は家族でうす暗くし、夜は（灯火管制の為）外に光が漏れないようにして過ごしていました。大声も出せず、小声でヒソヒソ話をする状態の毎日でした。

広島市内では、市が勝手に決めた強制疎開によって、家を壊され行き場のない人達も多く、我が家も二階をその人達に貸していたとのことでした。

その為に中学生は、空襲時の被害（火災の類焼）を防ぐために建物を壊したりする学徒動員に徴用され、軍関係者や教官に命令されるがままに一生懸命働いていました。

一番夢多き年齢なのに夢も希望も持たず、真つ黒くなつて頭から足の先まで砂けむりを受けながら、叱られながらの活動だったようです。

叱られると言っても普通の叱り方ではありません。棒を持って、見張り番が振り回していたとの事です。軍隊の人は、よく馬に乗り見回りをしていました。馬が通り過ぎて行った後には必ず、馬のフンが落ちてくるのです。いばつて、皆、そ知らぬ顔をして通り抜けて行くのです。

子供達は、馬の足音がすると家の中に逃げ帰り、そつと家の中から隠れて見ていました。

戦争がさらに激しくなると窓ガラスには和紙を切つて張りつけ、電灯はその光が外に漏れないように黒い布をまわりに巻きつけて、皆でひっそりと離れないように寄り添って寝ていました。飛行機の音がすると、皆子供なので震えて小さくなりかたまつて過ごしました。

## 産業奨励館（現在の原爆ドーム）の思い出

私は、産業奨励館（現在の原爆ドーム）には父に連れられて、又他の画家の人達に連れられて何度か中に入っています。

真ん中に立派な螺旋階段のあるモダンな建物で、市民の憧れの的でした。赤いジュータンが特別な場所には敷き詰められていました。

三階が、色々な催し会場として使用されてきました。画家達の心躍らされる場所で、絵の展覧会や絵画講習会を開いたり、勉強会も開き、デザイナーも養成していました。演劇も広島十一人座などもありました。他の催し物もありましたし、物産展もありました。

産業奨励館は、大正4年4月5日広島県物産陳列館として完成し、8月5日正午に開館しました。一階は事務所、二階は物産常設展示場、三階は催し会場でした。

ドームが原爆にあつたのは開館後30周年目のことです。

## 資料抜粋

## 広島県物産陳列館での展覧会

今日、原爆ドームの名で知られる広島県物産陳列館（大正10年に商品陳列所、昭和8年に産業奨励館と改称）は、県内産業の振興発展のため、文字通り、県内物産を陳列する会場として大正3〜4年に建設された。

一部鉄骨を使用したレンガ造り、三階建ての洋風建築で、一階は主に事務関係、二階は県内物産等の常設陳列場であつたが、三階は種々の博覧会、催物の会場として用いられた。

美術展もそのひとつである。しかも、県内産業の振興に関連する商業美術や工芸品の展覧会に限らず、洋画、日本画をはじめとすると一般的な美術展も数多く開催されていた。

館は二三階の各陳列場が約千平米という、他にはない広い展示面積を有し、地方に美術館や博物館がほとんどなかった時代にまさにこの役割を担つたのである。

竣工の翌年（大正5年）5月、館では広島県美術展覧会（県美展）の第1回展が開かれた。同

展は、以後、毎年春に行われ、戦前に30回近く開かれている。県美展とはいえ、出品者は県西部の作家が主であり、今日の県美展出品者に比しその範囲はかなり狭いが、それでも、このような展覧会がまれない当時では、地方の美術文化の向上に果たした役割ははかりしれない。

第1回展はほとんど規定のない自由出品であつたが、その年の末に結成された広島県美術協会が2回展以降、出品規定、審査方法等、展覧会の組織を徐々に整備していく。その結果、官展や中央の団体展と同じ監査による公募形式の展覧会がこの地に根つき、それによつて、中央展への予備軍としての作家もまたに選ばれた美術を享受する顧客層も育成されていったのである。

当初、館における地元作家の美術展は一部を除き、ほとんどこの県美展しかなく、その他の展覧会は、市内の崇徳教社、市公会堂、あるいは一般店舗を借

りて行われた。しかし、大正末になると、館内で教員作品展や広島美術院展等の総合展も開かれ、美術館としての役割が増すようになる。

とくに大正15年に結成された広島美術院展は質・量ともに県美展に比肩しうる展覧会であつた。県美展の委員が師範学校等の教師や長老格の作家であるのに対し、院に集まつた作家は中央の団体展に出品・入選した振興勢力が中心であつた。また、同人組織（日本画部・洋画部）をとり、その展覧会は県美展のように一般から作品を公募せず、同人の作品のみを展示していた。開催時期も、春の県美展に対し、院展は秋の開催であり、したがつて、館は春秋で大規模な展覧会を開くことになつたのである。

なお、昭和7年に院は日本画部と洋画部の対立から解散し、洋画部は広島洋画協会を結成する。しかし、この洋画協会の展覧会も、昭和11年の第4回展以降、資料から姿を消し、総合展

は再び県美展のみとなつた。

これと対照的に、昭和7年頃から館では芸柱社（日本画）、蒼原会（水彩）、朝光会（東光会・広島支部）等、小グループの展覧会が開催されるようになった。代表的なグループ展では、昭和11年の芸州美術協会の第1回展がある。広島出身の在京作家五人による同展は、鬚光、丸木位里ら優れた新進作家が加わつていた。

一方、個人展も早いものでは、昭和8年に開かれた独立美術協会の重鎮、清水登之の展覧会や、昭和10年の南薫造展をあげることができると。この昭和7年から11年の5年間は館における美術展の開催が多く、美術館としての役割が最も大きかつた時期といえるだろう。市内全体を見て、この頃、美術展は中国新聞社の講堂や福屋の催場等を会場にして数多く開催されており、戦前の広島美術が最も華やかな時代であつた。

後略、そして戦争の暗雲が訪れました。



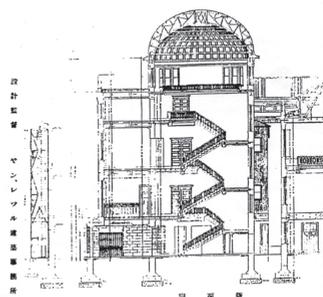
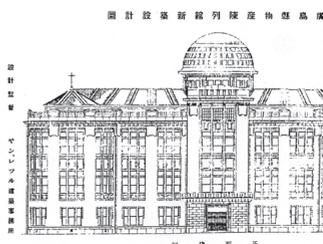
戦前の産業奨励館への展覧会搬入風景



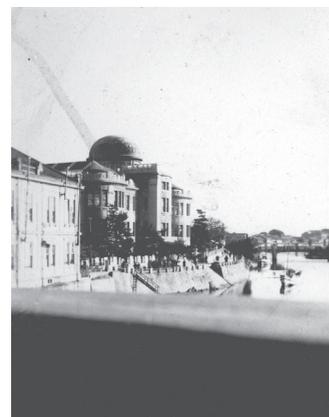
戦前の産業奨励館内の展覧会風景



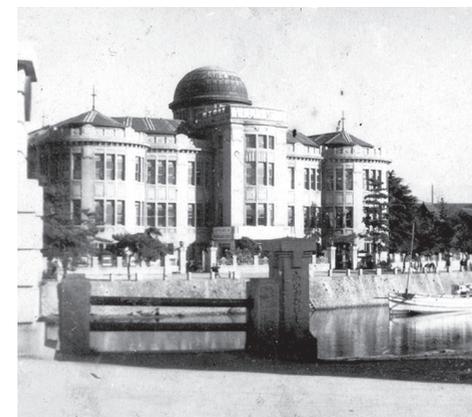
産業奨励館の展覧会 右より三人目父



産業奨励館の設計図（部分）



戦前の産業奨励館斜め全景



戦前の産業奨励館（相生橋より）



戦前の産業奨励館内部庭園  
東屋と噴水が見える貴重な写真



昭和8年10月 独立美術協会の重鎮 清水登之（前列右から三人目）・鈴木亜夫 展覧会／2列左より四人目父



昭和7年 蒼原会（水彩画）発会時の集合写真

## 父が親しく会っていた方達

○ 角北斗（中国新聞社）

戦前、戦後と気が合い、しばしば会って語らっていました。

○ 紺野耕一（中国新聞社・戦前、フォルム美術協会に所属）

親友の一人で、毎晩のようにお店に会いに来られていました。角さんの方が多分早く知り合い、紺野

さんとは誰にも聞かせられぬような話を密かにしていたと思います。

紺野さんは涙もろい情熱家で、話しだすと止まらなくなる方で、やさしい人柄でした。



角 北斗氏と父昭和13年頃か



角 北斗氏と橋本千代氏



紺野耕一氏 中国新聞社

○ 広島画壇の中では、母に聞いたところ左記の方々と交流があったようです。（順不同）

和高節二・鬚光・山路商・船田玉樹・丸木位里・南 薫造・阪井谷松太郎・福井芳郎・橋本千代  
大木茂・穂田伏見・檜山武夫・小林和作・柿手春三・宇根元 警・岩岡貞美・灰谷正夫・朝井清  
角 浩・二井谷徳三郎・太田忠・山中雪人・武永慎雄・竹澤丹一・新延輝雄・名柄正之・本田克巳  
浜崎左髪子・細井道雄・綿谷行四郎・石崎文子・森谷南人子・井上雲凌・稲田素邦 他（敬称略）

まだ父が愛し、親しくしていただいた画家の方々は沢山いらつしやると思うのですが、今私がい  
出せなくて、戦前だったのか、戦後だったのかも私自身の中であいまいな状態になっています。

**あいつ 光**  
1907(明治40年)～1946  
(昭和21年)  
広島県山県郡千代田町出身



本名石村日郎。大正12年大阪の天彩画塾に学ぶ。この頃から鬚川光郎、鬚光と名乗る。同13年上京して太平洋画会研究所に学び、二科展独立展等に出品。  
昭和15年美術文化協会、同18年新人画会を結成し、主要メンバーとして活躍。  
翌年応召し生き残るも、同21年上海にて戦病死。(39歳)

代表作「眼のある風景」「ライオン」「自画像」など。



帽子をかむる自画像  
広島県立美術館所蔵  
1943(昭和18)年

**ぎょくじゅ 船田 玉樹**  
1912(大正元)年～1991  
(平成3)年  
広島県呉市出身



昭和9年速水御舟の薫陶を受ける。御舟没後は、小林古径に師事する。  
同13年には、船田玉樹、岩橋英遠らと歴史美術協会を結成する。  
日本画における前衛とも言へべき活動を展開、また研究会を催す。



花の夕(部分)  
個人蔵  
1938(昭和13)年

**丸木 位里**  
1901(明治34)年～1995  
(平成7)年  
広島市安佐北区安佐町出身



昭和9年東京落合明風主催の明風美術研究所に通う。同13年には、船田玉樹、岩橋英遠らと歴史美術協会を結成する。  
同20年被爆直後の広島に赴く。  
同22年前衛美術協会を結成する。  
同25年第3回アン・パンゲン展に、後夫人との合作「八月六日(原爆の凶)第部 幽霊」を出品。以後、夫人と同シリーズの共同制作を続ける。  
同42年埼玉県東松山市に丸木美術館を建設する。



ラクダ(部分)  
広島県立美術館所蔵  
1938(昭和13)年

**南 薫造**  
1883(明治16年)～1950  
(昭和25年)  
広島県豊田郡出身



明治40年東京美術学校卒業後、英国留学。帰国後、文展、光風会展、日本水彩展。大正7年光風会会員。昭和4年帝国美術院会員。  
昭和7年東京美術学校教授。昭和12年芸術院会員。昭和19年帝室技芸員。  
昭和25年1月4日没(66歳)  
〔六月の日〕「春先き」〔農夫〕



坐せる女  
広島県立美術館所蔵  
1908(明治41)年

**阪井谷 松太郎**  
1907(明治40年)～不詳  
大阪市出身



大正14年、昭和6年槐樹社展に出品。昭和3年、同9年帝展入選。昭和5年大阪美術学校卒業。昭和6年広島に移り、福井芳郎等と広島洋画研究所を開設する。  
昭和6年県展に無鑑査出品し、翌年より委員。翌年広島洋画協会結成に参加。  
昭和8年東光会、翌年朝光会出品。昭和10年離広。同17年より旺玄社出品。戦後も同会を中心に出品する。



窓際  
個人蔵  
1934(昭和9)年

**福井 芳郎**  
1912(明治45年)～1974  
(昭和49年)  
広島市出身



大阪美術学校卒業。帝展、槐樹社展出品。昭和6年広島洋画研究所設立。昭和7年広島洋画協会結成に参加。同年東光会展で東光賞を受賞し、翌年会員になる。  
昭和11年「記念結成」に参加。  
戦後は、原爆記録画「ヒロシマの怒り」を制作する。  
昭和32年新協美術会創立会員。昭和49年原爆症悪化し11月13日没(62歳)



蓮  
広島県立美術館所蔵  
1928(昭和3)年

橋本 千代

1894(明治27年)~1967(昭和42年)  
広島県安芸芸高田市出身



広島師範学校卒業。小学校の教師。図画工  
作教育に力を注ぐ。大正15年広島美術院  
創立、会員。昭和3、6年槐樹社展。  
自宅アトリエ開放。巖光、野村守夫ら使用。  
広島児童教育、美術界の発展に貢献。昭和  
42年11月28日没(73歳)



静物  
広島県立美術館所蔵  
1935(昭和10)年頃

大木 茂

1899(明治32年)~1979(昭和54年)  
広島市出身



大正3年頃より若山為三、斎藤興里に師  
事。大正8年県美展初入選。昭和3年槐  
樹社展初入選。以降、帝展新文展に入選。  
昭和7年東光会結成に参加。以後連続出  
品する。戦後は日展入選を重ね、東光会  
県美展の審査委員等を務める。  
昭和54年8月2日没(80歳)



窓際  
第12回帝展 個人蔵  
1931(昭和6)年

あきた  
穂田 伏見

1888(明治21年)~1973(昭和48年)  
広島県双三郡出身



明治41年上京し、白馬会洋画研究所に学  
ぶ。明治44年郷里の小学校教諭となる。  
県美展には、大正5年の1回展より出品。  
昭和6年、12年太平洋画会展に入選。  
同8年より広島洋画協会展に出品する。  
同13年フォルム美術協会結成に参加する。  
※佐渡久士の段原小学校での担任。



風景  
個人蔵  
制作年不詳

檜山 武夫

1906(明治39)年~1974(昭和7)年27歳にて自死  
広島市大須賀町出身



大正13年広島工業学校機械科卒業。同  
14年旧国鉄に奉職(機関助手)。勤務の傍  
ら独学で絵を勉強する。鉛筆、コンテの素  
描から、昭和4年頃より油絵を始める。  
同5年全関西展入選、同6年二科展に  
「機関庫」陸橋が入選。同7年広島洋  
画協会の創立に参加する。  
同年11月画家になる夢が絶たれ、現実と  
理想に悩み鉄道自殺する。後にSL機関士  
画家と言われた、太田忠とは先輩、親友の  
間柄であった。(父のアルバムに、自殺を報  
じた中国新聞の切り抜きがあった)



陸橋  
広島県立美術館所蔵  
1931(昭和6)年

太田 忠

1908(明治41年)~1971(昭和46年)  
広島市出身



国鉄機関士で、昭和13年新制作協会展初  
入選。  
昭和27年新制作会員。日本国際美術展。  
日本現代美術展。  
38年、43年フランス中心に欧州遊学。  
昭和46年4月29日没(63歳)  
54年9月県立美術館で「SL機関士画家  
太田忠遺作展」



備後の山A  
個人蔵  
1962(昭和37)年

小林 和作

1988(明治21年)~1974(昭和49年)  
山口県吉敷郡秋穂町  
出身



京都市立美術工芸学校で日本画を学ぶ。そ  
の後洋画に転向。  
春陽会会員、独立美術協会会員となる。  
尾道に定住、県内美術界の振興に貢献。  
46年勲三等旭日中綬章受章。昭和49年  
11月4日没(86歳)  
「海辺の丘」「山湖」「伯耆大山の秋」



隠岐白島  
広島県立美術館所蔵  
1968(昭和43)年

柿手 春三

1909(明治42年)～1993  
(平成5年)  
広島県双三郡  
三良坂町出身



昭和3年川端画学校に学び、6年独立展、13年美術文化協会創立、23年自由美術協会会員。58年東広島市立美術館で、「東広島ゆかりの画家一人展」  
広島平和美術展代表委員。県美展無鑑査。



アジアの森  
三良坂平和美術館所蔵

宇根元 警

1904(明治37年)～1970  
(昭和45年)  
呉市出身



葡萄  
個人蔵  
1940(昭和15)年

大正13年広島師範学校卒業。この頃より県美展入選する。昭和4年の第1回展より呉赤べら会に出品。翌年1930年協会展に入選。同6年独立美術展に初入選し、以降連続出品する。同7年上京し、清水登之に師事する。同15年独立美術協会賞を受賞。同19年帰広。戦後も、独立美術協会を中心に出品する。

岩岡 貞美

1913(大正2年)～1945  
(昭和20年)  
広島市出身



玖村風景  
個人蔵  
1935(昭和10)年

昭和8年広島県師範学校卒。翌年より県美展出品。昭和10年独立美術初入選し同19年まで連続出品する。昭和13年フォルム美術協会結成に参加。翌年県美展審査委員となる。昭和20年陸軍に応召。同年8月6日被爆死(32歳)

灰谷 正夫

1907(明治40年)～1985  
(昭和60年)  
広島県安芸高田市出身



大阪市天王寺新燈社美術研究所に学ぶ。昭和13年フォルム美術協会結成に参加。戦後は二科会、自由美術展出品し、会員となる。昭和52年一科会退会。昭和60年9月11日没(78歳)



静物(キャベツ)  
個人蔵  
1930(昭和15)年

朝井 清

1901(明治34年)～1968  
(昭和43年)  
呉市出身



大正3年海軍工廠に入廠、版画は独学。昭和元年の第1回展より広島美術院展に出品。同4年帝展に初入選する。県美展では、同5年より委員。同7年に広島洋画協会結成に参加する。朝光会には、同8年の第1回展より出品。同13年日本版画協会展特賞、同年新興美術協会人賞を受賞。戦後は、日展、東光会、日版会を中心に出品する。



ほおづきととかいげ  
呉市立美術館所蔵  
1929(昭和4)年

角 浩

1909(明治42年)～1994  
(平成6年)  
広島県府中市出身



ピカソ画房所蔵  
年代不詳

昭和8年東京美術学校卒。光風会展、文展、独立展、サロン・ドートンヌ出品。新制作展、日本現代美術展、日本国際美術展「ロマンと幻想の画家角浩展」

	<p>東光会会員。昭和23年日展、54年大洋会創立に参加。62年退会。 日展審査員。新日洋会結成に参加。</p>	<p><b>新延 輝雄</b> 1922(大正11年)～ 広島市出身</p>
<p>バラ色の広場(第19回日洋展)油彩</p>		

	<p>大正13年広島師範学校卒業。 日本水彩展出品。同会員となる。 昭和10年帝展、光風会展、新制作協会展。 戦後は、日本水彩画会を中心に出品。 昭和42年、比治山女子短期大学美術科創設に関わる。昭和54年同大学教授を退官。</p>	<p><b>名柄 正之</b> 1903(明治36年)～1997 (平成9年) 広島市出身</p>
<p>ピカソ画房所蔵 年代不詳</p>		
		

<p>広本名 耕四郎。 昭和9年卓美展、昭和16年院展、昭和27年院友。 昭和52年6月25日没(76歳)</p>	<p><b>綿谷 行四郎</b> 1900(明治33年)～1977 (昭和52年) 広島市出身</p>		<p>昭和15年東京高等師範学校卒業。昭和25年広島大学附属高校美術教諭、関西新制作展、新制作展。 昭和48年「戦犯(第二次世界大戦)ニギニアにおける転進の記録」自费出版。 昭和49年12月28日没(55歳)</p>	<p><b>細井 道雄</b> 1919(大正8年)～1974 (昭和49年) 福井県今立郡出身</p>
---	---	---	--	--

	<p>東京川端画学校に学び、のち東京美術学校に入学。昭和17年同校卒業。 同23年同郷の画家水谷愛子と結婚。 同26年前田青邨に師事する。 同31年院展初入選後院展で奨励賞・日本美術院賞・大観賞などを多数受賞する。 後に法隆寺金堂壁画復元模写にたずさわる。釈迦やキリストをテーマとした白描画を描く。広島市立大学教授を務めた。</p>	<p><b>山中 雪人</b> 1920(大正9年)～2003 (平成15年) 広島市出身</p>
<p>樹下黎明 広島県立美術館所蔵 1969(昭和44)年</p>		
		

	<p>昭和初期より絵の道一筋に精進を続ける。昭和5年広島県美展初入選。同10年帝展入選。同23年東光会展初入選以後連続出品する。 同27年日展初入選以後連続出品し同32年特選。昭和46年画集「ふるさとの民家」を刊行する。 東光会常任理事。日展会員。</p>	<p><b>武永 楨雄</b> 1913(大正2年)～1997 (平成9年) 広島市出身</p>
<p>山ノ背 (広島県芸北町) 1975(昭和50)年</p>		
		

	<p>福山師範卒業後、教諭とし、古典書教育の指導。 戦後、前衛派に転向、広島大学教授。 日展、現代書道展、毎日書道展審査員。 太陽社主宰。「竹澤丹作品集」「百葉集」「生きている証明」「百画集」など。 号：江東</p>	<p><b>竹澤 丹一</b> 1907(明治40年)～1997 (平成9年) 三次市出身</p>
<p>個人蔵 1992(平成4)年</p>		

資料 画家略歴

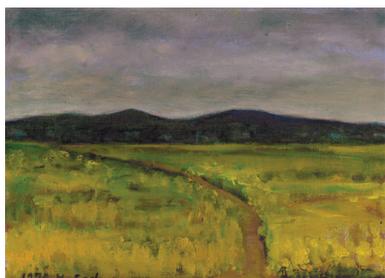
<p>本名稔明。昭和6年広陵中学校卒業。昭和10年、中央美術再興展。日本南画院展、戦後は院展、日本表現派展。</p>	<p>浜崎 左髪子 1912(明治45年)~1989 (平成元年) ハワイ・ヒロ市出身</p>	<p>武蔵野美術大学卒業。国画会会員。新人賞、国画会賞、三年続けて優作賞。現代日本美術展、日本国際美術展。</p>	<p>本田 克巳 1924(大正13年)~ 広島出身</p>
--	---	---	--



熊谷守一 1933(昭和8)年7月

父のアルバムの中に熊谷守一氏と記した写真が一葉ありました。父とどのような接点があったのか？撮影場所も不詳ですが、貴重な資料としてここに掲載しました。

佐渡久士作品



「高原の秋景」1970(昭和45)年 油彩



制作年代不詳 水墨



制作年代不詳(山手町自宅よりの遠望) 油彩



制作年代不詳 油彩



石崎 文子



二井谷 徳三郎

資料 仕入れ関係



関西洋画材料商組合創立總會集合写真 撮影年代不詳  
後列右端が父、ホルベイン工業清原定謙社長・ホルベイン画材吉村徹社長が写っております

戦争中は芸術的な活動はあまり出来なかったと思います。

父はあちこちと諸先生方を訪ねる時には、一人で何も言わず出かけて行き、先生方の様子を聞いていたようです。父にとって絵の話をしている時が、一番幸せな時だったのかも知れません。

日に日に戦況が悪化していく中、芸術家に対しての風当たりは厳しくなる一方で、水彩画・油絵・日本画の材料も枯渇し、泥絵具（現在の水干）で細々と描いていました。

水彩画・油絵・水墨画も、誰にも分からぬように、特に憲兵に見つからないように描いていたようです。

### 綱島家と日本画家和高節二画伯と父のこと

父と出会った時のことを和高伸二さんは奇妙な出会いだったと話しています。

終戦後、彼が高校に入ったばかりの頃店を訪ねたら、父に、「和高先生から、息子がいると言う話は一度も聞いたことがない。ひよっとして外に出来た子かい」と言われたそうです。

彼はすぐに「内か外かわしゃ知らん。佐渡さん、貴方だって、内に出来た子か、外に出来た子か証明できますか。」と言い返し、父に「そのとおりじゃのう。コーヒー飲もうか」と誘われ、近くの店に入っておしゃべりしたそうです。

それ以後も、広島に帰るたびに、父に会いに行ったり話してくれました。

昭和17年の夏、和高兄弟は、三篠小学校西北角の東洋工業に勤めていた綱島辰夫宅に下宿していました。綱島氏は、北海道利尻の綱元の息子で早稲田大学時代、俳優になり関西で映画のロケ中に神戸女学院の学生と恋仲になり、駆け落ちして広島に来た変わった経歴の持ち主だったと伸二氏は言っていました。

綱島宅には、山路商氏の作品もあり、本人もよく来ていました。巖光・丸木位里画伯等の秘密のアジトだったようです。そこへ、和高先生は二人の息子を預けたのです。

戦争が激しくなり、危険極まりない状態の中で、綱島家は画家達を支え続けました。

憲兵が家の前を絶えず行き来し、その家では昼は天皇の写真が飾られ、夜になるとミロのヴィーナスに



村の子供 昭和8年 モデルは和高氏の子供たち  
広島県立美術館蔵

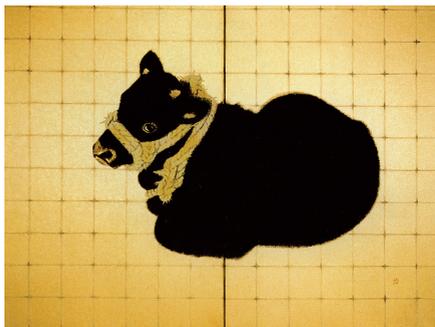
日本画家 和高節二  
88歳の面影



明治31年広島県安芸高田市向原町(旧長田村上長田)に生まれる。講義録・通信教育、続いて大正8年東京の川端画学校・日本美術学院に短期在学の他は、向原を離れず、孤軍奮闘。大正9年中央美術社展入選後、帝展・文展・院展他に次々入選を果たす。昭和15年42歳の時紀元二千六百年奉祝日本画大展覧会に出品した(牡牛)が最高賞を受賞する。昭和43年在広の美術家と共に丹頂会を結成する。平成二年92歳で没する。



むらのむすめたち(部分) 昭和11年  
個人蔵



べちこ(部分) 昭和44年「べちこ」とは仔牛のこと  
個人蔵

和高節二氏の純粹芸術に対する気概と、故郷を愛する気持ちを語った述懐詞

### 述懐詞

レンブラントのような  
絵かきになりたいと  
少年のころは夢を見た  
東京に出ていった  
東京は自分のすめる  
世界でなかった  
すなわに山にもどった  
遠くの方から東京をながめた  
それもいけなかった  
もつ度目をして  
青い空を見た  
はじめて、本当の自分が見えた  
野原にどっかり腰をすえた  
ここに生まれ、ここにせむら  
ここで一生、しつかに、わがままに  
くちまけてもらえ  
幸せにきかいた  
作家として、こんな幸せはないと思つた  
人間のよろこびが湧いた  
たつた人の人間のよろこびか湧いた  
豊かさが、無限にひろがった  
生きてくることの、生きてきたこと  
生きてゆけることの、素晴らしい  
喜びは大きい、幸せも大きい、  
どうしたらいい絵がかけるか  
かけるだろうか  
そのことのみのみあけられた  
山ものほらも人間も  
みんなけんこうだ、素朴だ  
野の花にも、小鳥たちも、天國だ  
空もすみに漆んでいる、きれいだ  
ここが浄土だ  
よろこびも幸せも、ここに



中国東北部で少年時代を送る。大正9年に引き揚げ広島市段原町に移る。  
昭和2年全関西展入賞。翌年二科展初入選。  
同11年田中万吉・福井芳郎らと二紀会を創立。  
同12年坂本寿・灰谷正夫らと広島フォルム美術協会を創立する。(後に靨光も参加。同16年特高に検挙され、拘留される。同17年8月釈放されるも、同19年没す。獄中死に近いものであった。  
絵画制作のみならず、詩誌発行・シニールレアリスム映画自作上映するなど、戦前の広島における芸術運動の主導者の一人であった。



犬とかたつむり 昭和12年 広島県立美術館蔵

※特高(特高警察)  
特高とは、内務大臣直轄の特別高等警察の略称。  
戦前の日本で、天皇制政府に反対する思想や言論、行動を取り締まる事を専門にした秘密警察組織。  
日本が戦時色を強めるにつれ、社会主義・共産主義・反戦運動、又統制経済を維持する為、弾圧・監視・検閲が行われ、その活動は、過酷な尋問や拷問を常とした。

飾りかえていたそうです。食事の時には、何時も「お兄ちゃん、戦争に行つてはいけませんよ。高等学校に入りなさいよ。そして、帝国大学へと進みなさい」と二人共、毎日のように言われていたので、一生懸命勉強したそうです。  
綱島宅に集まって来る人達は、皆本当に自由に生き、生命がけて平和を愛してきた人達でした。  
和高先生と父は綱島宅へ息子二人を下宿させたものの、気になり、畠の方からよく家の中の様子を伺つては、立ち去っていたそうです。  
二人は、息子達の事もあるけれど、綱島宅に集まり小声で話し合う自由人の画家達の様子を憲兵や※特高に気付かれないか常に気にかけて、見守っていたそうです。綱島家にあった山路商氏の絵は、伸二氏にはどれも異様に見えたと言っていました。後に山路商氏は獄死し、靨光画伯は戦場で病死しました。

## 和高伸二氏からの書簡の抜粋

和高伸二氏と私の出会いは平成13年の事です。伸二氏からの手紙の中から書き出してみます。

さてさて問題の綱島宅。あの山路商の作品もあり、あやしいなんちゅうもんじゃあない。鬚光、丸木位里、佐渡久士等々の秘密のいわばアジトですがな。戦争末期、この危険極まるアジトに、和高伸二はよくも二人の息子をほうりこんだものですよ。中略

しかしオヤジもすごい教育をやったもんだ。万一あの家が本当に官憲に襲われていたら、勉強どころの話じゃないですよ。みんなみんな、ほんとうに自由に生き、平和を愛して生きていたんですよ。

生命がけだよ。でもね、あの変な絵（中学時代、綱島宅にある絵を見てそう思った）を描いた山路商は獄死、鬚光は戦病死。節二は過労がもとで病気でねこむ、久士は「ピカソ」で官憲にいじめぬかれる、位里はもちろん多くの画家や自由人は、あるいは戦場へ、あるいは戦争職場へほうりこまれた。やりきれんわい。

この連中、あの奨励館を舞台に生きているんですよ。そのドラマを、今私でなければ再現できないか。佐渡さんを語るのもここが最

高の舞台になりませんか。画家たちの面倒を見て晴れ舞台に送り出すプロデューサー役でしょう。中略

それよりの、ワシの中学時代の日記は、昭和18年はずうーと綱島宅。昭和19年5月6日より、下宿をそのままとして長田（向原）より列車通学。この少し前だよ、鬚光が兵隊に行きとうないというて、私の隣の部屋で夜おそくないていたのは。何か周辺にこの頃変化があつて、向原から急に通学することになったのでは。中略

みんなみんな単独で生き存在していたものはないのだ。佐渡久士がいて、回りがいて、さらに反対・賛成がいて、つかまえるやつがいて、かくまう奴がいて、たとえ戦時中でも、自由というものは必ず一本筋が通っているものなんだ。その人間のドラマを含んで近代の歴史が成立するのよ。美術の世界も、何人かの偉いという人で歴史と思うなよ。

久士氏の周辺から芽がでた。そしてそれがそれぞれに活躍する。それが広島文化だよ。中略

オトウチャン、佐渡久士氏、生活を芸術して生きられた自由そのものの人。これがすごいよ。だから広島を中心部の良心と私が呼んでいるのですよ。後略

※和高伸二（のおじ）……和高伸二氏の次男  
元神戸山手女子短期大学教授・美術史家  
平成19年没



左から和高伸二・筆者・久子・中西利一郎  
郷里・向原での第1回和高伸二氏展にて

## 芸術関係以外

### 戦前町内で行われていたこと

大きな庄屋があり、お祭りごと等があれば大人達が庄屋に集まり、打ち合わせをし、子ども達も一緒にやっています。

### ○いのこ祭

神棚を作り、庄屋に預けてある大きな石を、石の神様として酒と塩で清めます。商売の神様なのです。一年に一度の大事な行事で、代々受け継がれて来たようです。

清められた石のまわりに、稲藁で作った縄と和紙で作った紙飾りをつけます。

石が抜け落ちないように、又、皆で引っぱって歩けるように、3m位の縄を8〜10本つけます。それを皆で持ち上げ、（引きずらないように）地面に石を打ちながら、一軒ずつ回っていきます。



いのこの石と紙飾り

「いっしょ、いっしょ、いっしょもちつきって、はんじょせい、はんじょせい」と、全部回り終わったら、石を神棚の元の場所に供えます。

子ども達は、大人からお菓子等もらいます。大人達は、ささやかな祝酒を飲み、生きていることに感謝していました。戦争が激しくなる前のことです。でも、いつまで続いていたのか分かりません。

#### ○もちつき

お正月を前にして、隣が仏壇屋で広がったので、朝から集まり、何軒か気の合った人達でもちつきをしていました。親達はやつと手に入れた小豆や黒豆、きび等を男性達が杵でつき、子供も一緒になつて小さな手で丸餅をまるめたりして賑やかでした。

段々物資が不足してきましたが、皆で新しい年を元気に迎えたくて、もち米等大切に残しての生活でした。杵でついた「もち」は最高においしく、非常食用に「カキモチ」や「あられ」にしたものです。私自身、その時の光景は思い出せますが、いつ頃までやっていたのかは全然思い出せません。

まだ敵の飛行機も来なかった頃だと思えます。えびす神社の祭、お正月の新年の挨拶回りも役員の人達が代表して、一軒ずつ回っていましたが、戦争が激しくなり中止となりました。まだ他にも様々な行事があったと思いますが、残念ながら思い出すことが出来ません。

## 原爆のこと

### 昭和20年8月6日の忘れることの出来ない原爆投下の日

投下された時間に、父は丁度廿日市の住居にいて助かりました。

前日(5日)、当時広島高等学校から仙台の大学に入学していた親しい学生が、ピカソ(当時、広美堂)を訪ねて来て、「おばさん達に僕等が仙台で受けた爆撃のみじめな話をしてあげたいし、おばさんに会いたいから」と言い、余り気乗りのしない父を道案内に、廿日市の家に来て、色々な話を聞かせてくれました。「逃げる時には、先ず、金を持って逃げよ」と、懇々と語ってくれ、皆で雑炊を夕食に食べました。「おそこから泊まって行け」と何度も言ったのですが、彼は聞かず広島の親戚の家に泊まると言っただけで帰りました。

父も、その晩、「軍用旅館で残留者での話し合いがあり、一杯飲む事になっているから帰る」と言ったのですが、私達は無理やり止めたのです。

次の日、父は朝起きられなくて寝ていました。

8月6日午前8時15分、大きな音がして、あの無気味なきのこ雲が廿日市からも見えました。何が起きたのだろうと、その時は原子爆弾とは知らず、皆家の外に出て見つめていました。

見たこともない、驚くほど異様な大きなきのこ雲でした。

父は、廿日市近くの楽々園の方に落ちたらしいと聞いて、自転車に乗り急いで出かけて行きました。その内、広島方面に火の手が上がり、当時父は堀川町の班長（役員）をしていたので、町内の方が気になり、広島市内に向かいました。

丁度己斐駅近くであの黒い雨に遭い、火の手もあちこちから上がり、堀川町には入ることが出来なくて、真っ黒い顔をして、くたくたになって廿日市に帰って来ました。

広島橋はあちこち落ちているので、通れるところを通って、広島駅まで行ったと言っていました。

火が広がり、家の下敷きになった人達の手、足、うめき声や、助けを求め人達の声が聞こえましたが、父は助ける術も持たず、目をつむって、心の中で、「助けられずごめんなさい」と言い、やっこの思いで、広島駅の方へ行けたと私に話してくれました。

可哀想で涙が出るし、どうして良いか分からない状態で、動ける場所までやっとなどり着き、大変な事が起きたと知り放心状態になったそうです。

前夜父を連れて来てくれた青年が生命の恩人となったのですが、あれ以来姿を見ていません。

毎年8月6日には、私達は青年が無事である事を祈りました。父は中国新聞の「たずね人コーナー」に何度も青年のことを載せましたが、返事は返って来ませんでした。

広島は三日三晩真赤に燃え続けました。その間、親戚の人達が歩いてやっとなどりつかれたのに、その場で倒られました。子供の私には何が起きたのか理解出来ず、悲しい出来事が次々に起き、一緒に泣い

たものです。今でもあの時の事はしっかりと覚えています。

廿日市にも、広島からトラックに乗せられ怪我をした人達、身体中血で赤く染まった声も出ない人達、子供から年寄りまで、男なのか女なのか分からなくなっている人達が次々と運ばれてきて、廿日市小学校の校舎や講堂の中が病室の様になりました。

死者も沢山運ばれて来て、校庭に掘られた大きな穴に次々と入れられていました。

子供だったので何が起きたのか分からず、次々と来るトラックをビクビクして見ていたら、親に叱られて家に帰らされました。

叔母たちが廿日市にやっとなどり着いて再会したのに、髪の毛を櫛でとくと、櫛に髪の毛が全部ついて来て頭から無くなってしまう状態で、本当に可哀想でした。

祖母や母は、手を貸して助けていましたが、皆に会えて喜んだのも束の間、その場で亡くなっていきま

した。

私達は、次々と亡くなる人達を見て、子供心に悲しい夢を見ているようで、親と共に泣いていました。今までに見たこともない出来事で、可哀想で、ブルブルと震えていました。

廿日市でする事もなく過ごしているうちに、父は発熱、下痢と続き、今でいう原爆症の症状が続きました。黒い雨に遭い爆心地をさまよった直後だし、弱い身体だったので皆で心配しました。薬もなく、そのような状態が何日も続きました。

私達は、苦しそうな父の姿を見て、「死んだらどうしよう、死なないで！」と祈る毎日を過ごしていま

した。「お父さん！負けたら駄目よ、絶対元気になるからね」と言っていました。

父は戦後も黒い雨に遭った為に、仕事中に誤ってナイフで手など切ると血が止まらなくなり、皆で止血して、急いで島病院に連れて行くことも多かったです。

## 戦後の歩み

昭和20年8月15日、日本は天皇陛下のラジオから流れる玉音放送を聞きながら、親達は涙していました。私達子供はラジオの言葉がはつきり分からず、後で日本の敗戦を父母に聞きました。

廿日市での生活で、父がやっと元氣を取り戻した時に、明治大学教授の松本滝蔵先生が訪ねて来られ、総選挙に出馬する意志を語られて、父は自分の性格から断れず同志の運動に専念していました。

商売は全然出来ない状態でした。

先輩（広島県立商業）の新聞記者が、広島市内もボツボツ復興しているから帰って来るようにと勧めて下さいました。「有る時払いで良い」と親切に言われ、昭和21年の秋、堀川町に4坪のバラックを焼野原に建てて帰って来ました。回りは見渡す限り瓦礫の山で、足の踏み場もない状態でした。

その当時、町内では三軒しか建っていないので、家から宇品港が良く見えました。

広島市内は全部焼かれ跡形もなく、沢山の人が亡くなったのだという事を、その光景は物語っていました。

た。雨の夜などは人魂がよく出て淋しく、子供心に恐ろしかったです。

焼野原で瓦礫等を除けると、沢山の骨が出て来て（隣が旅館だった為）、母に言われるままに箸で壺の中に入れました。私達は何も分からず、父母にも聞けず、小さな四人姉妹は手を合わせ怖くて泣いていました。

父は店の事だけをしていましたが、訪ねて来る人は殆どいませんでした。ただ「ピカソ画房」として、芸術家達の為に早く店を開けたいと思ったようです。

昭和22年、広島復興の為に広島アテナム協会を発足し、佐伯好郎文学博士を会長として活動する事になりました。まだ焼野原には、堀川町通りにも、五、六軒しかなかった頃です。

原爆が落ちて、草木も生えぬと言われていましたが、すぐに鉄道草とか、私達の身長より高い草が沢山生えて来て、ビックリしたものです。

商売用に廿日市から硝子戸棚を一個持ち帰り、商品を大阪文房堂、吉村商店（後のホルベイン画材）、土井画材、東洋画布等に無理を言っては分けてもらい、天井無しの汽車で復員兵と一緒に乗って持ち帰って来ていたようです。この間は余り商売にはならなかったのですが、段々と絵を描く昔の仲間達も集まって来て、又戦地から帰って来る方もいて、少しずつ商売も動くようになりました。

昭和22年10月には台所も増築しました。まだ、町の中もきれいになっっていないので、自分達の手で少しずつ片付けて足場を整理していました。

廿日市で飼っていた鶏も連れて来て、野菜も少し植えましたら、ビックリする程出来ました。今考えると、放射能を沢山浴び、汚染された土で育ったものだったわけですが。昭和22年、アメリカ人が店に最初に来た時は、背は高く、言葉は分からず、私達は隅の方で小さくならかたまっていました。

でも、彼等はニコニコ笑って、何度も来てお土産と言つては、日本では見たこともない真白い厚い紙のノート、鉛筆やチョコレートなどのお菓子をくれました。

父は、そのアメリカ人達を相手に、手と目で、もちろん日本語で話していました。何度も訪ねて来て、楽しそうに笑顔で話しかけてきました。

絵の分かるアメリカ人が訪ねて来たことで、「ピカソ画房」という店名に決めた事に対して満足そうでした。絵を愛する人は、外国人でも変わらないと思つたそうです。

戦前、戦後を通して、神奈川県沢井村には多くの画家が、戦争中より東京を離れて疎開していらつしました。

知人の藤田嗣治、猪熊絃一郎、萩野康治、中西利雄、その他数々の画家達が、家族と一緒に居住されていて、父は上京すると、度々商品仕入れを兼ねて訪問していました。

諸先生方より、「焼野原の広島では商売にならないと思うから、我々も応援するし、東京に出る、出る」と言われ、心配して下さいましたが、父は決心がつかず、帰広して来ました。商売気のない父はただ絵が好きで、絵描きの人達が大好きで、絵を見たり、語り合うのが一番の楽しみだったようです。

商売の方もどうにか頑張つて、昭和24年6月にやっと、木造二階建の店舗を建て、画廊も併設しました。父の念願の夢であった画廊です。広島で最初の画廊でもありました。喫茶店の壁面に絵を掛け並べたところはありませんでしたが、父は連日喜んで画廊でお客様の相手をしていました。その頃本通り商店街も堀川町通りも、やっと商店街らしくなりつつありました。



新装なった店舗兼住宅の前に立つ父。隣にはイクナガ写場があり、遠くに天満屋の懐かしい広告塔が見える。屋根上には物干し場があり、中央看板の右には風呂用の煙突が立っている。



戦後の木造平屋仮店舗の前に立つ父母と四姉妹。近隣の人達の後方にあるのは、駐留連合軍オーストラリア兵か？店前は未舗装で、ゴザを敷いておけば、坊主頭の子供達が並んでいる。(昭和22年頃か)

角浩画伯滞欧作品を皮切りに、武者小路実篤先生の展覧会や、中西利雄展などの他、次々に在広画家の個展やグループ展を行い賑やかでした。

画廊に来て下さる方相手に話す父の、嬉しそうな姿が焼き付いています。戦争を乗り切った父にとって一番幸せな時だったのかも知れません。

## 思い出した二つの大きな火事

戦後、道路が現在のように区画整理されていない頃、堀川町の西側あたりには、バラック建ての小さな店が寄り集まって商売をしていました。

その一角から火が出て、たちまち全焼してしまったのです。バラックだったので、火の回りが早くアツという間に燃え広がり、近隣の住人はその消火作業を心配しながら見守っていました。

この火事の後、区画整備され南北の道路（現中央通り）が出来ました。

次の大きな火事は大変でした。昭和24年12月8日夜の事でした。

福屋百貨店の東隣にあった映画館（東洋座）が火事になり、火の粉が風に舞って我が家にも飛んで来ました。風呂桶に水を出しながら、その水を皆でバケツリレーして、物干し場からあちこちの屋根に向けて水をかけました。その間も、大小の火の粉が止むことなく次々と降りかかって来ました。

母は自分の体に水をかけ、私達子供も一生懸命に力を出して、家の中の階段を水の入った重いバケツを持ってせつせと運びました。

髪の毛も火の粉で焼けて縮れながら、無我夢中でバケツリレーをしました。まだ小・中学生だった私達

でしたが、（その時父はいなかったように思います。東京にでも行っていたのかもしれませんが）近所の人達も皆、屋根に登り水を撒いて家を守りました。

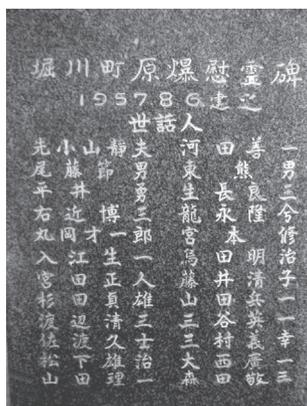
その火の粉があちこちに飛び火して、比治山の一部も焼けました。消防車のサイレンの音があちこちでして、腰が抜けるほどでした。

広島の街のあちこちに原爆の碑が建てられるようになって来た頃、堀川町でも沢山の人達が苦しみ亡くなったので、鎮魂の碑を建てようという事になりました。

碑文は佐伯好郎博士に揮毫していただき、天を指さし助けを求めるモニュメントが建立されました。毎年八月六日には町内や縁故ある方々が、祈りを捧げていらつしやることと思います。



堀川町の原爆鎮魂の碑



世話人の中に父の名前がある

## 松本滝蔵氏と衆議院選挙の思い出

松本滝蔵氏が衆議院選挙に立候補され、バラック同様の我が家に、平澤和重（当時外務省）後にNHKニュース解説者）、福島慎太郎（国連日本代表）等々偉い方々が来られ、選挙活動をしていました。母は苦しい台所で賄いをしていましたが、松本氏が当選された時の両親の感激は、とても大きかったです。あの頃の両親のうれしそうな顔が現在でも目に浮かびます、当時のピカソ画房は、細々としかまだ商いはありませんでした。

私にはその当時に苦い思い出があります。両親の留守中に、税務署員が二、三人家の中にズカスカと勝手に入って来ました。「親がいらないから駄目」と言うのも聞かず、子供の物まで全部封印して「開けてはならぬ」と言って立ち去りました。

両親が店の事を省みず、夢中になって選挙の応援をしていた結果でした。

選挙が終わり落ち着いた頃、松本滝蔵氏が水泳の古橋選手・橋



店舗2階の座敷での記念撮影。後列左端橋爪選手、同3人目に父と筆者。前列右端より平澤和重、古橋選手、佐伯好郎博士、母、松本滝蔵、一人置いて浜口選手。

爪選手・浜口選手を連れて我が家に来られました。二階で色々な話しを聞きながら楽しい時を過しました。私が中学一年の頃だったと思います。

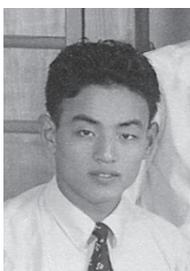
夢にまで見た水泳選手が、我が家に来られるとは思いませんでした。両親が選挙を一生懸命手伝ったお礼の意味もあったのかもしれませんが。



古橋広之進  
1928(昭和3)年9月生  
静岡県浜松市出身

元水泳競泳選手（自由形）

彼の活躍で、敗戦で打ちひしがれた日本人は狂喜した。また、日本の復興に大きく貢献した。戦後すぐはIOC、FINAに加盟出来ず、全盛期には五輪に出場出来なかった。昭和27年、やっと出場出来たヘルシンキ五輪ではメダルを取る事が出来なかった。しかし、昭和24年の全米水上選手権では驚異的な世界新記録を樹立。アメリカのマスコミは「フジヤマのトビウオ」と讃えた。彼の作った世界記録は33回に及んだ。



橋爪四郎  
1928(昭和3)年9月生  
和歌山市出身

元水泳競泳選手（自由形）

長身を生かして11回も世界記録を更新するも、11回とも古橋広之進に続く2位であった。しかし、昭和27年のヘルシンキ五輪では銀メダルを獲得した。今もメダルを取れなかった古橋氏の為に、その銀メダルを自宅から出さず封印している。



浜口喜博  
1926(大正15)年6月生  
香川県高松市出身

元水泳競泳選手（自由形）

昭和27年のヘルシンキ五輪で、浜口・鈴木・後藤・谷川の四人で出場した800メートルリレーで銀メダルを獲得した。

## 夢を追い続けて

大きなアテナム協会の看板を東南角の入口にバラックから移し、アテナム協会員の集合、文化振興目的で、佐伯好郎博士を囲んで、多くの方々が来られました。

峠三吉氏もあの細い身体で日参されたとのこと。又、夜には時折り二階に阿川弘之氏等、若き人四、五人集まり酒を酌み交わし激論もしていたそうです。

全国から色々な人達が「ピカソ画房」を訪ねて来られました。画廊で絵画展の無い日曜日には、紺野耕一氏関係の教会の祈りの集会所にもなり、楽しくもあり忙しくもあつたと母は言っていました。

大変お世話になった南薫造画伯も竹原から来られると、我が家で家族と共に昼食を召し上り、それを楽しんでいらつしやいました。先生の心からの温かい言葉があります。

「画材店は大きくせず、店の雰囲気を持たせ、集まる人を温かく包んで語り合い、親しみやすい店として、人々に筆を持ち描く心を起こさせるようにせよ」と、両親に助言して下さったそうです。

当時よく出入りし、絵を描き、芸術・文化を語られた方達の多



峠三吉 大正6年～昭和28年  
大阪生まれ。幼時に広島に移り、広島商業学校卒業。25歳の時キリスト教の洗礼を受ける。28歳の時に翠町の自宅で被爆。原爆症に苦しみながら「原爆詩集」を刊行。文学活動にとどまらず、丸木位里・俊の「原爆の図」展の開催、被爆者団体の結成など、戦後の広島の平和・文化運動の旗手として活躍した。36歳で病没。



阿川弘之 大正9年広島市生まれ  
東京帝国大学文学部国文科卒業。海軍に入隊・復員後、志賀直哉に師事する。昭和21年「年々歳々」で文壇にデビューする。  
昭和という激動の時代に遭遇した人間の悲哀を浮き彫りにした作風は、文学界に独自の分野を開拓した。卓識と端正な文体は多くの読者の敬愛を集めている。主な著作・春の城・雲の墓碑・夜の波音・山本五十六・井上成美他多数。



清原定謙社長  
1905～1981

くは上京し、各分野で活躍されていて、父は上京する度にお訪ねしていました。父の楽しみの一つだったようです。いつも、爽やかな顔をして帰って来る父でした。

その頃、ホルベイン工業の清原社長には、店の事や家族の事を大変心配頂きました。

広島ではまだ商売もなかなかだと思ふからと、再三にわたり、東京へ店を出してはどうかと言われたようですが、その時も決心がつかなかったようです。後々になつても、その時代に清原社長が熱心に勧めて下さった事に対して、感謝で胸がつかまると母は言っていました。

父は、広島を愛し続け、「広島ピカソ画房」として頑張り続けたのだと思います。

前にも書きましたが、何も無いところから、自分の力で一步一步夢に向かって進んで来た、大切な「故郷の地」だったのだと思います。

又、新聞や、ラジオ、テレビからも、戦前から知っている方達が「ピカソ画房」の主人に是非と声がかかっていました。

「青年と語る」という懇談会や討論会にも引っぱり出され、色々話しているうちに「今頃の若者には根性が欠けている」と言ったら、若者から「根性とは何か」と責め立てられて、本当に困ったと言っていました。

戦前の青年達の事を思い考えると、自分の夢を持たぬ力の抜けた若者に感じたのでしょ。

東洋工業（現マツダ）からモデルに誘われて、53才から60才代の初め頃まで新車が出るたびに、よく宣伝用のポスターに父一人で、又父とモデル嬢と二人で、年寄り役でポスターに登場しました。

「ピカソの親父さん」として知られ親しまれた父でしたし、赤色を着こなしベレー帽を上手に自分の姿の一部としていたダンディーな人でもありました。

実は父に合う色を見つけ出し、父にさせていたのは母でしたが、着こなしは、父のセンスの良さでした。

お金は無くとも、誰にも負けぬセンスの持ち主の両親でした。

東京で若い絵描きに会う時など帝国ホテルのロビーに呼び出し、「ヤアー！」と片手を上げたポーズで出迎えていたのです。

おしゃれな父の選んだ最高の場所であり、シチュエーションであったのかも知れません。

あの姿は東京の知人の間でも有名で、外国人が多く出入りするホテルでも、ちっともひけをとらず人目を引く姿でした。誰も知らない東京での父の一面です。

戦後は画材店も他に無く、当店が唯一の店で本当にのんびりとしたものでした。

父はこの人間は将来性があると見込んだら、その画学生が一生懸命絵を描いて持って来るたびに、厳しく

批評し、喝を入れたものです。

「自身が当時若かった事でもあり、広島で絵の事を分かっていても言う人が余りいなかったのか、私には分からないけれど」と母は言っていました。

若い人達には、「上等の品（絵具など）を使用すると駄目だ」とたしなめて買わせず、「安い物で良いから一枚でも多く描け」とよく説教をしていたそうです。

絵具・材料その他に不自由する人には、「金のある時に払えば良い」と言い、生活の貧しい人にはタダであげていたりもしました。

広島から東京に出かける時も、絵が売れずお金に困っている青年には、油絵具のホワイトの大きいのを一、二本ポケットに入れて持参し渡していたようです。

只、両親が一生懸命良くしてあげた若者も、他に店が何軒か出来ると黙って移った人も多かったようです。「去る者は追わず」の精神で、新しい若い芽を大切にし、自分達の出来る範囲で力を貸し相談にのっていました。

諸先生方を大切に思う心で、自分の足で訪ね、変化して行く芸術（美術・絵画）の話や作品を見て来ました。

自分の眼と心を常に養い、接して来た多くの人達の変化を読み取っていたようです。



昭和35年8月15日父53歳の誕生日に撮った家族写真  
左より匡子・父・久子・三千恵・紀久代・母



店員の中に、中学卒業後父親に伴われて入社した、小田興治君がいました。何も分からぬ彼に、マットを切るナイフの研ぎ方から教えていました。彼は父から「ダメ、ダメ」と言われながら、一生懸命一日中していた時もあります。

あの頃、荷物は木組みで来ていたので、彼は私と一緒に夕方までに全部バラして風呂用の薪を作るのも手伝ってくれていました。

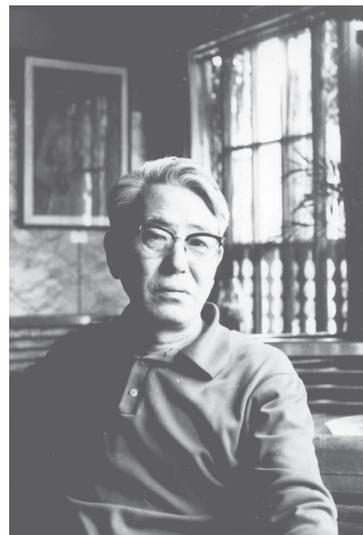
彼は一生懸命仕事を覚えようと努力しながら、夜は私の両親の希望で夜学の高校と短大に行っていました。本当に大変だったと思います。

私達姉妹が大学まで行けたのも、彼が店の仕事をしながら黙って頑張ってくれたからだ、今でも私達は感謝しています。

父の仕事に対する教えをしつかりと受け継ぎ、父が黙っていても次から次へと自分から仕事をしていました。

まさにピカソの生き字引で、父の遺志を継いで本当に良くピカソ画房の為に働いてくれたと思います。

退職後の今も、「ピカソ画房」を愛して下さるお客様の



小田氏が入社した昭和34年頃の父  
喫茶田園にて

ところへよく出かけてくれます。

私が広島に帰った際に、時々会って話を聞くのですが、感謝の気持ちで一杯になります。

父を理解し受け継いだ彼を、父が遠い空の上から見守り続けている事と思います。

私自身も、彼に感謝せずにはられません。

今日のように絵画人口も増加して来ますと店舗も乱立して、至るところで値引き合戦があり、客引合戦もあり、父は同じ道を歩むこと好まず、「わが道を歩けよ」と店員に教えていました。

また、「自分で良き絵を描こうとする人は、常に純粹であるべきで、清らかな心の持ち主であってほしい」と願っていました。

「夢を持った若者の目は、心から輝いて見えるのだ」とも言っていました。

そういう想いを持ち続けた父だったので、生き残った画家達と、戦後の県美展を一日も早く復活させようとして拒まれた時は、外野から気をもんでいたようです。しばらくして、県美展の開催が決定した時は、とてもうれしかったようです。



昭和39年次女匡子の結婚式の日の父と母

その後、父は画家達とは一線を画して、好きで絵を描いている人の事を考え行動に移しました。

父が行った事

- 一、医師の人達だけの医師会画展⇨杏林画会を、我が家の二階で発足させました。
- 二、職美展の発足にも力を入れ、職場美術が出来ました。広島も落ち着きを見せ、沢山の職場の方達が絵を描き始め、ピカソへ顔を出されるようになりました。(何人かで考えて行動にうつしたのでしょうか。)
- 三、広島チャータール会にも力を入れ、父がチャータール会の事を東京や大阪より聞いて、五年位かかって発足させました。大阪地区の幹事だった清原氏(ホルベイン工業社長)他と協議し、やつと会が広島にも出来ました。

ピカソは多くの方々に協力して頂きました。父は、常に画壇の底辺運動に力を入れました。

「実行に実現あり」と言う言葉通りです。「金をもうけることが、本意ではないけない」と、心底から思っていた人だったと母は言います。

今は、各方面に油絵は油絵、水彩画は水彩画、日本画は日本画と、



昭和54年頃 安芸宮島にて

それぞれ大なり小なりの多くの会が出来て、広島でも年中展覧会・グループ展・個展等開催されるようになりました。絵を描く人口も多くなり、それを楽しく観て下さる人も多くなりました。

父は、そういう状況をしみじみと喜んでいました。

昭和47年1月15日、銀行員だった花澤良章君と末娘の四女久子が結婚し、ピカソの店を継ぐ事となりました。父は花澤君を画材業界の皆様を紹介すべく、土井画材センターの47年度の会合に一緒に出席した足で、東京八王子の私の家へ来ました。

やっこの思いでたどり着いた時、父の足はパンパンに腫れサングラスも入らない状態で、その変容に私は驚いてしまいました。その頃から、父の慢性肝炎が少しづつ悪化していたようです。

広島頃から親しかった肝臓病の名医で、父の大親友である柳澤文正博士(広島当時ABC原爆傷害調査委員会・現放射線影響研究所に勤務)に診療をお願いし、画家の陶山氏と一緒に来てもらいました。陶山氏は能美島出身で、広島にいた頃は毎日のように店に来ていました。

彼は学生時代から我が家に来ては父の話聞き、絵に対する夢を共に語っていました。九州を一周してスケッチ旅行をしたいという彼に、父が中古の自転車を買って与えた事もありました。家の力仕事も手伝ってくれていました。

上京後は、中西利雄画伯のアトリエを借りて住んでいました。父の用事もずっとしてくれていました。戦後ピカソの家にもよく来て、手伝い、父の相手をしてくれた若者の中の一人です。

柳澤先生には「広島に帰らなくて良かったなあ、そのまま帰っていたら一週間の生命だったよ」と言わ

れました。そして私の家で、頂いた薬と私の考えた食事療法とで父の療養に専念する日々が続きました。四十余日後、「もう帰っても大丈夫」と柳澤先生に言われた時には、心からホッとしました。父は広島に帰ってから、病状も少し落ち着き店にも出れるようになりました。お客様と話すことを又楽しむ事が出来るようになりました。

昭和56年3月、佐渡久士・千鶴子の墓守りにと、花澤良章・久子の次男真志を佐渡家に入籍させました。父は自分に良く似た子供だと言って喜んでいました。

この年の4月、ピカソ画房創業50周年を祝い、宮島口の「一茶苑」で内輪だけの祝賀会をしました。総勢18名での会は大変楽しく、父も喜んでいました。父と母は着物姿で、久しぶりに見る美男・美女（少し太り過ぎていましたが）の装いと、父の笑顔が素敵でした。

## 父の死

山手に住むようになってから、する事も減り、縁側に座って庭を眺めながら一人で囲碁をしていました。山手町は市中から離れており、外出の回数も少なくなりました。

そして、肝臓病で入院を繰り返すようになりました。



昭和56年創業50周年の内輪の祝賀会（一茶苑）

病院は市中にあり、訪ねて下さる方も多く、病人同士でも楽しんでいました。人間が好きで、病院の中では好きな「タバコ」を吸いながら、皆と語り合っていたようです。病院は、父にとってはむしろ楽しいひとときだったと思います。



筆者が東京へ帰る時、広島新幹線ホームで



山手の家の縁側で一人囲碁の勉強をする父

昭和57年5月31日、父の顔色が普通ではなく黄色いことに母が気になり、主治医の判断に頼りました。その日父は、広島県立美術館の方々に会い、尾崎正章画伯にも会い、自分の愛し続けた「ピカソ画房」にも寄り、喫茶店「ロンロン」に行ったそうです。自分の足の赴くまま動いて、本人なりに満足していたのでしょう。父は自分の病気の事が分かっていたのかもしれませんが。

次の日6月1日、検査入院という事で、記念病院に行きました。結果は思わしくなく、かなりの重病だと言われ渡され、早ければ二〜三ヶ月の生命と言われたそうです。運良く治療が功を奏して、年末12月27日には考えられぬ程良くなり、退院することが出来ました。

昭和58年元旦、お雑煮の餅も黒豆等もおいしいと食べるものの、寒中故に肺炎にだけは注意していたと母は言いました。

3月には、父が元気だったこともあり、母を沖繩への社員旅行に行かせる程でした。母は、父の自分に対する最後の感謝の気持ちだったのではないかと思ひ、後になって感無量で何も言えなかったと話していました。

ところが3月15日、急に胃液を大量に出し止まらず、急いで病院に連絡し再入院となりました。種々の手当を下さいましたが、4月3日父は75歳の生涯を閉じ、天に昇って永い眠りに入りました。それは桜の花開く、美しい、美しい日でした。

病床で父は、懐かしい昔の話を聞かせてくれ、最後までしっかりしていました。

生前父が私によく話していたのは、「我が家は男の子がおらず女の子が四人なので、桜の咲く春に、娘四人に満開の桜の中で見送ってほしいものだなあ。出来れば、桜並木を通って行きたいものだ」と言っていました。

私は父に「お父さんは多くの人を助け、自分の夢に向けゆっくり進み、自分は絵描きにはなれなかったけど、絵描きさん達が大好きで、立派な方々にも沢山会うことができ、幸せな一生だったかもね。だから天の神はちゃんと見て下さっているから大丈夫よ」と言いました。

本当に父の思いが天に通じたのか、自分の一生を自分自身で演出して、遠い空に昇りつめ、一つの星になっただと思います。

病弱の身体で、75年間長生きさせてもらい、大好きなお酒も浴びるほど飲み、画材界の会合の席では持ち歌でもあった「バックスお前は酒のたる」の唄を歌い、踊り、ハシで色々な物をたたいて楽器にし、楽しんで父、皆を楽しませた父、その場にいる人達を飽きさせなかった父。

画学生や絵を描く人達の集いの席で歌ったのは、中西利雄水彩画家が作った歌と曲、「あなたも絵を描く、私も描く……」。「今日は楽しく、トアエモあの日、朝から私を小鳥が起こす……」というのもありました。

現在、「ピカソ画房」を引き継いでいるのは三代目の若い花澤憲治、佐渡真志の二人と、永く勤めてくれている店員の皆様です。

父の大切な夢も時代と共に変化して来ていますが、遠い空の上から、若い孫二人の活躍に心からエールを送り続けていると思います。



### 中西利雄

1900年(明治33年)東京市京橋区霊岸島(現東京都中央区新川)に生まれる。1927年東京美術学校西洋画科卒業。1928～32年渡仏。1934年第15回帝展「優駿出馬」特選、1936年小磯良平・猪熊弦一郎らとともに「新制作派協会」を創立する。戦後、1948年中野区桃園にアトリエを着工するも完工を待たず病没。享年49歳。詩人彫刻家高村光太郎が、このアトリエで十和田湖の乙女の像を完成する。音楽と鉄道をこよなく愛し、「デッサンの歌」を作詞・編曲し講習会の愛唱歌として歌われる。1991年6月妻・富江(佐渡久士の実妹)79歳にて他界。

1941(昭和16)年9月



マダムアゼル S嬢 1938(昭和13)年  
広島県立美術館蔵



週刊朝日表紙 1961(昭和36)年7月28日号



彫刻と女 1939(昭和14)年  
茨城県近代美術館蔵



森のカフェ 1931(昭和6)年  
個人蔵



優駿出馬 1934(昭和9)年  
日本中央競馬会蔵



曇り日の離宮と駅 1947(昭和22)年  
千葉県立美術館蔵

## 中西利雄画伯と父の思い出

水彩画家中西利雄画伯のフランスで描いた色彩豊かな素晴らしい絵は、皆様、展覧会等で見て知っておられることと思います。

中西利雄画伯は父の妹の富江と結婚し、戦前から絵を描く若者の為に各地で講習会を開いて来ました。戦争が激しくなり、絵も描けず、神奈川県沢井村に家族で疎開し、自然の中でのんびりとした生活をしていました。

戦後東京中野の家に戻りましたが、中西画伯はアトリエ建設中に病いに倒れ、自らのアトリエで絵を描く夢を抱きながら、ついに力尽き、男の子三人を残してこの世を去ってしまいました。

父の嘆き悲しみは大変なもので、素晴らしい水彩画家を49歳の若さで送り、身体の弱い父でしたが、一生懸命残された男の子達の為に、中西画伯死後、自分の店は母や店員に任せ、何度も東京へ行っていました。中西画伯を愛し、画伯も父のことを尊重して何でも話し合っていました。

## 高村光太郎先生と父の思い出



十和田裸婦像 1953(昭和28)年5月

中西家のアトリエに、高村光太郎先生が制作の為に一人で住んでおられました。

父は、高村先生に会う為に度々上京しては話していたようです。

私が女子美大生の時、丁度、十和田湖の「乙女の像」の制作中でした。中西家を訪ねる度に高村先生に呼ばれて、アトリエで先生の話を色々聞かせて頂き、智恵子さんの話も聞き、作品も見せて頂きました。背の高い大きな手をした先生でした。

先生が制作中に体調を崩され時、父が心配して柳沢文正氏と陶山氏達に声をかけ、先生を元気づける為スッポン料理人を呼びました。

先生は元気になる料理を「おいしい、おいしい」と言って、喜んで食べておられました。

高村先生は、心のやさしい穏やかな、笑顔の素晴らしい方でした。一人静かに過ごされていて、心の通



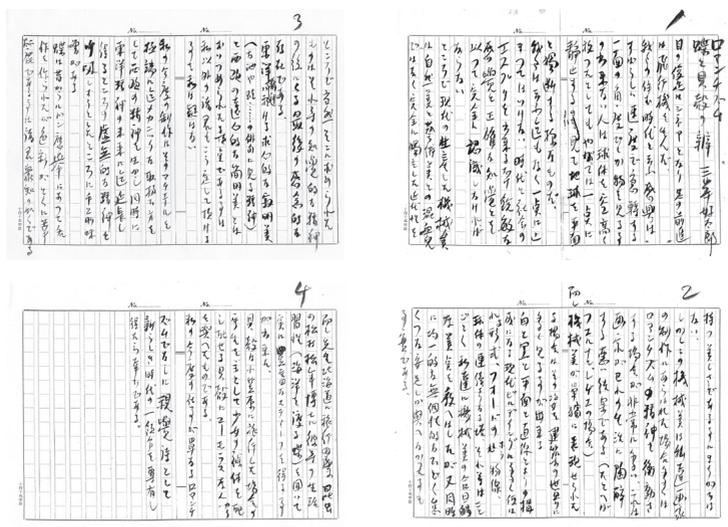
(昭和27～28年頃か) 中西利雄のアトリエにて

### 高村光太郎

1883(明治16)年～1956(昭和31)年 73歳  
彫刻家の高村光雲の三兄弟の長男として東京都台東区に生まれる。明治30年東京美術学校彫刻科(現東京芸術大学)に入学。文学にも関心を寄せ、与謝野鉄幹の新詩社に入り「明星」に短歌・詩・戯曲など発表する。明治35年卒業。その後ニューヨークに留学、ロンドン・パリに滞在し明治42年帰国する。1914(大正3)年詩集「道程」を自費出版する。同年長沼智恵子と結婚。評伝「ロダン」などを発表し、西欧の近代思潮を精力的に紹介する。1938(昭和13)年智恵子と死別する。1941(昭和16)年詩集「智恵子抄」を出版する。戦後1952(昭和27)年故中西利雄のアトリエにて十和田湖「裸婦像」の制作を行う。日本彫刻界の近代化に大きな役割を果たした。

い合う人達が時々集まり、静かに語られ、暖かい言葉を私にもかけてくださり、それを今でも大切に心の  
中にして置いています。

# 三岸好太郎からの書簡



「ロマンチズム 蝶と貝殻の弁」 三岸好太郎

目の俊足はシネマとなり足の前進は飛行機を生んだ。我々の住む時代と云ふ感興はすばらしい速度で急転する。一面の角度でしか物を見る事の出来ない人は球体を空高く放つたとしてもやがては一点に静止するのを見て地球を平面と独断する様なものだ。我々は云ふ迄もなく一点に止まってしまうてはいけない。時代と社会のエスプリを出来るだけ鋭敏な感覚と正確な知覚とを以て完全に認識しなければならぬ。そして現代の正確な知覚と生確な知覚とは自然美と芸術美との混血児ではなく完全に独立した近代性を持つ美しさである事にまちがひはない。衝動さるる場合が非常に多い。これは画家が己れの生活に陶酔する悪い結果である。(たとへば「エルナン・レチエ」の場合)

機械美が単独に表現せられたる場合はその姿を建築の世界に多く見る事が出来る。白と黒と平面と直線と球体の連続よりなる塔、それ等はことごとく私達に機械美の目的な美点を教へはしたが又同時に均一的な無個性的なひとく「退」くつな安足「息」しか与へなかつた事も事実である。

ところで当然そこに求められたものはそれ等の知覚的精神の後にくる最後の感「観」念的な存在である。

東洋精神に於ける求心的な寂寞美(古池や蛙……の俳句に見る精神)と西欧の遠心的な簡明美とはおいつめられたる頂点である事は、私以外の諸君もこう定めて頂ける事を私は疑はない。

私の今度の制作はそのマチエールを極端に迄メカニクな取扱ひ方をして西欧の精神を生かし同時に東洋精神の未来に迄延長し得るところの虚無的な精神を呼吸しようとしたところに手前味噌がある。

蝶は昔からルンドン、応挙によつて名作を作られたが色彩がとくに華麗である事は諸君衆知の如くである。

而し先年北海道に旅行の際昆虫の松村松年博士に彼等の生活習性(海洋を渡る蝶)を聞いて実に豊富なモチーフを得る事が出来た。

貝殻は小笠原に旅行した場合の写生を主として少女の裸体を配し死せる貝殻にユイモラスな人カクを与へたものである。

私の今度の仕事が単なるロマンチズムでなしに視覚詩として新しき時代の一領分を専有し得たら幸ひである。

(広島、ピカン画廊・佐渡久士宛書簡 1934.4 (一) 23)



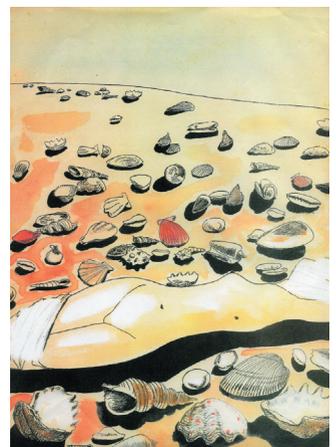
- 三岸好太郎
- 1903 (明治 36) 年北海道札幌に生まれる。
  - 1921 (大正 10) 年札幌一中を卒業し上京。独学で絵の勉強をする。
  - 1923 (大正 12) 年春陽会展に入選。翌年春陽会賞を首席受賞し、画壇の注目を集める。
  - 1926 (大正 15) 年中国を旅行する。
  - 1929 (昭和 4) 年道化をモチーフとした作品を発表。
  - 1930 (昭和 5) 年独立美術協会の結成に最年少の創立会員として参加。
  - 1932 (昭和 7) 年末から翌年にかけて、様々な前衛的手法を試みた。
  - 1934 (昭和 9) 年蝶や貝殻をモチーフとなり、夢幻的な光景が描かれる。また、手彩色の「筆彩素描集・蝶と貝殻」を刊行、「蝶ト貝殻(視覚詩)」という詩も創作する。
  - 1934 (昭和 9) 年斬新なアトリエの建築を計画するが、完成を見ることなく、同年7月旅先の名古屋で客死。享年 31 歳



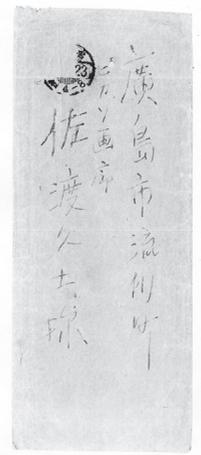
スケッチブックの絵



道化役者 1932 (昭和 7) 年  
北海道立三岸好太郎美術館蔵



スケッチブックの絵



三岸好太郎の絶筆となった旅先・名古屋の宿から父へ出された封筒 (北海道立三岸好太郎美術館蔵)





中学卒業後、ピカソの店員として43年間働いた小田興治氏。  
広島市安佐北区安佐町小河内出身。

## 小田興治氏の回想

私の出身は、今は広島市に編入されていますが、田舎も田舎、熊が出て不思議ではない安佐町小河内出身です。小河内小学校の永井先生が、当時ピカソに出入りしておられたのが機縁となりました。

先生が社長からピカソ店員募集の話を目にしておられ、たまたま中学卒業後行き先の決まっていない私に、担任の先生を通して「市内で働きながら高校と短大に行ける所があるかどうか」と言われました。

早速先生と出向き面接を受けました。すぐに「働いてみないか」と言われ、「お願いします」という事で、昭和34年4月1日、父親に付き添ってもらい初出勤しました。

父は厳格な人で、「一度ここと決めたからには、転々と職を替えるものではないぞ」ときつく言い聞かされたものです。

店には、先輩の松本氏（後にホルベイン工業技術部長）が働いておられました。

松本氏も夜学に行かれており、私も急ぎ願書を提出して松本商業高校に入学しました。（松本氏とは一年

半位、共に働きました）

松本氏は大変厳しい方で、「仕事は教えてもらうものではなく、人の行っている事を見て覚えるように」と言われただけでした。

その後は、社長、奥様、四姉妹の中に加えていただき、夢中で仕事の内容等を覚えていきました。

また、何かにつけ戸惑っていると、社長に怒られる事が度々でした。

「石の上にも三年」の格言通り、それからの3年間は学校に行きながら夢中で過ごしました。

3年が過ぎた頃には色々な事が出来るようになり、自分なりに仕事の段取りも出来、社長にもあまり怒られなくなりました。

一方、奥様には行儀について、これまたよく怒られたものです。

柿手先生と奥様が話しておられた時、たまたま前を通らなければならぬ事があり素通りしたところ、奥様から「人の前を通る時には、声を出すなり手を出して、すみませんと言って通るものだ」と言われました。「なるほど……同じ過ちを3回も繰り返したら、自分は信用されない人間になるな」と思い、いろいろ教わった事を肝に銘じたものです。

昭和42年頃までは、物を運ぶ時、すべて自転車で乗って移動していました。

例えば、100号のキャンバスは、自転車で斜めに積んで、ロープで動かないように引っぱり、片手で運転しました。当時から商品の配達先は色々あり、映画館には、泥絵具・ハケ等、広告会社にはポスターカラー・筆・ケント紙などです。当時から、多くの大手企業と取引させて頂いていました。

又、東洋工業の新車発表には宣伝部の人に来て、「社長！モデルになって下さい」と言われ、何回も依頼されていました。ベレー帽姿の社長の人物像と人柄がモデルにピッタリだったのでしょうか。

当時各絵画会も旺盛に活動しており、杏林画会の展覧会がある時には、「下見会」と言って、諸先生方の作品を預かり、社長と一緒に島外科へ自転車で運んだものです。

メンバーは、島、町井、藤本、横山、伊藤、川上、塩田、川堀、長崎、赤松、末田、道中、松島の各先生方でした。

社長は、よく足に「腫瘍」が出来、歩きにくいので、自転車に二人乗りして本通りを通り島外科へ通いました。社長から「すまんのう」と言っていた事覚えています。

その頃、ピカソ画房には女子美術大学を卒業した人（長女三千恵さん）がいるということで、女子高生達が美術の先生方に薦められて、社長に受験等の相談をしに来ました。

その内、学生達も社長の事を「おじさん、おじさん」と言って慕い、度々来店してくれるようになりました。彼・彼女達は、その年々に受験の報告にやって来て、合格したと聞くと「良く頑張ったなあ」と我が子の事のように喜んでおられたのが印象的でした。

その中に、一人変わった美大生がいて、上京する時と帰広した時、必ず社長に挨拶に来られました。服装や髪型がその都度変わっていたので、会うのが楽しみでした。その美大生とは、広島で現在活躍中の益田久範先生です。

昭和38年頃、三女の紀久代さんが店を手伝いに入られました。

昭和39年には、東京オリンピックピクが開催され、新幹線が東京・大阪間を3時間で結び、日本中が浮き立つような興奮に包まれていました。

ピカソも人員が増え、何かと多忙な時期に差しかかって来ました。

私も、社長、奥様、ご家族の皆様のお陰で、高校・短大と無事卒業する事が出来ました。

昭和40年代の初め、ホルベイン会が有馬であり、社長と一緒に参加させて頂きました。

会場で各社の社長を紹介してもらい、春木社長（東洋画布）にも初めてお会いしました。会では、ピカソの社長は「名物社長」で通っており、経歴の長さに思いを馳せざるを得ませんでした。

又、学生達では、広島大学教育学部美術教員課程の一期生が店に入りに来てくれました。

吉田正浪・久保田辰男・難波平人・木下 和・安森征二、他多くの学生さんが、社長から多くの事を学ばれた事だと思います。その多くの方は、高校・中学の美術の先生にられました。

12〜13期生くらいまで、多くの学生さんが来店してくれました。ちなみに当時の広大は、林林男、砂原久両先生が指導されていました。

その当時店に出入りしておられた方々

福井芳郎、灰谷正夫、宇根元警、太田忠、浜崎左髪子、柿手春三、石崎文子、穂田伏見・安宅義則、大木茂、名柄正之、野村守夫、丸木位里、増田勉、船田玉樹、朝井清、武永楨雄、和高節二、大歳暁、

熊本政義、神田周三、寄重、佐分利新、尾崎正章、角浩、山中雪人、水谷愛子、細井道雄、松本隆士、平尾太、本田克巳、陶山侃、吉本観一、紺野耕一、砂原久、荒井不可志、岡崎勇次、新延輝男、新庄高校小田先生、阿部芳明、西川一平（西川ゴム社長）、森加先生（弁護士）吉見社長（ウツミヤ証券）、太田和好（中電経済研究所所長）、の各氏他。（順不同・敬称略）

又、変わった経歴の方では、野球審判で国鉄マンの須原正氏などがおられました。その他、立町なめくじ横丁で画廊兼飲み屋「梟」を経営されていた、志條みよ子様、「酒場大学」の名柄学長（著名人が集まる最高の所）、各方面の先生方、会社員の方、店主の方等々と、幅広い社長の交流により、お店を盛り上げていただきました。私も社長に「酒場大学」や、「梟」によく連れて行ってもらいました。当時、「酒場大学」の常連客の仲間内でグループ展が開かれており、社長は「街井角無？」（マチイスイム）という変名で出品もしていました。

社長は常々、「広島には芸術を広めていかねばならない、それでこそ平和になれるのだ」と、また「我々の店は、その運動の底辺の役割を担っているのだ」ともよく言っておられました。

そして、お客様や学生達を喫茶店「田園」や「ピッコロ」・「店の前に有り」によく連れて行っておられました。

当時の材料仕入先は、紙類：豊菱紙業、額類：佐伯額店・日額・宮本時一、印刷：林栄社（田谷行平氏の父親と2代続く）などでした。

40年代前半には、三女吉川紀久代さんと入れ替わりに、四女の久子さんが店に入られました。

その頃、広島絵画人口をもっと増やそうという事になり、メーカーに協力してもらい、色々な所でスケッチ大会を催し底辺拡大活動を行いました。

たまたま、日本銀行広島支店に森田かめい氏が転勤で来られ、絵を描いておられたので、よくご来店いただきました。店にもすぐに馴染んでいただき、すぐに森田氏の先導でピカソスケッチキャラバンをする事となりました。

店を休みとし社長・店員をはじめとして参加者を募り、7、8台の車のアンテナにリボンをつけて、3、4回行ったと思います。

その時、長女の池田さんも、子供二人連れて来て、一緒に参加されました。私も若く、皆んなで本当に楽しい日々を過ごさせていただきました。



1971（昭和46）年8月芸北町八幡高原  
ピカソスケッチキャラバン



中央日銀広島支店森田氏と左久子



1971（昭和46）年10月大山二の沢  
左端小田氏右端より母・父・妹久子



キャンパスに向かう父

広島銀行本店の新社屋が出来た時、祝いの絵画を重役室に取りつけて欲しいと頼まれ、社長と一緒に2〜3日かけてコンクリートの壁にノミを金槌で叩いて穴を開け、鉛を埋める工法で作品の取り付け作業をした事もありました。(当時、荒井不可志氏が銀行員として本店におられました)

昭和40年代は個人的にも、会社も成長期にあったと思います。

広島県・市の医師会館が中町から観音町に新築移転し、企画で県内の医師の方々の芸術展を開くことになり、カンダ工房と協力して仮設パネルを作り、壁に傷をつけない様に設置するのに4日もかかりました。

その後、芸術展は会館で4年間し、現在場所が変わっても40回展以上続いています。当作業のお陰で、どんな場面・場所でも展覧会が開けるようになりました。

医家系の展覧会では、杏林画会(医師)、鳩紫会(歯科医)、石榴会(薬剤師)の三師会展も、鳩紫会展も、岡山白青会と杏林画会の合同展も、社長の骨折りにより始まり、今も脈々と続いています。

その間、堀川町にあった社長の自宅が、山手町に新築引っ越しし、店も改装して2階を貸画廊にしました。当時、県立美術館が新築竣工するまでに3年近く要した為、個展・グループ展とよく利用していただきました。仕事も段々と多忙になりつつあったので、大学生のアルバイトをお願いしました。

そのアルバイト仲間、一組のカップルが出来、今でも彼等は私に話しかけてくれます。

山手町に引っ越し、社長は毎朝久子さんの車で、奥様と出勤。夕方まで一日中店で仕事されていました。

朝は必ず「田園」か「ピッコロ」にも出勤していました。店の鍵は私が預かり、開店と閉店の開け閉めをしていたものです。

私事ですが、私が昭和46年1月に結婚した時、社長、奥様は我が子の慶事のように喜んで下さいました。社長も昭和50年に入ってから、週に3日くらいの出勤となり、私も少し寂しい気持ちになりました。

昭和51年、日額主催のアメリカ西海岸への招待旅行があり、社長から「小田、行ってこい」と言ってもらい、初めて海外旅行をさせてもらいました。又、土井画材センターの「卯月会」にも、よく出席させて頂きました。

昭和55年頃から、社長も段々と病気がちになられ、余り出勤されなくなり、その内病状が悪化し入院されました。仕事帰りに病院に見舞に行った折り、よく寝ておられたので社長には声をかけず、奥様だけに挨拶してそっと帰ったら、後日奥様に「小田は声をかけなかったな」と言われたそうで「しまった」と思った事を今でも思い出します。

そして、昭和58年4月3日、社長とのお別れの日が来ました。

16歳から43歳まで、父親のように可愛がっていただき、誠に有難うございました。これで私と社長の一時代が終わったと思いましたが、私は社長の人柄の深さに敬意を持って接しました。

その後、私も社長の様に一人一人のお客様、取引先を大切にしようと、心に秘めて日々仕事に打ち込みました。

嬉しい事に、退職後3年過ぎましたが、来店のお客様から「小田さんは？」と声を掛けて下さる方もいらっしやるとの事。

社長から教えられたお客様に対する接し方に、間違いはなかったのだなと嬉しく思っています。

# ピカソ画房 七十七年史

一九三二年	昭和七・二・七	佐渡久士、広島市流川町に洋画材店・ピカソ画房を創業（24歳） 久士の実妹（中西利雄の妻）富江、店を手伝う この頃、三岸好太郎と親交あり
一九三五	昭和一〇・三・七	佐渡久士、小林千鶴子と結婚 現在の本店所在地・堀川町25番地に二階建の店舗を借りる
一九三六	昭和十一	中西利雄、佐渡富江と結婚
一九三七	昭和十二	藤田嗣治画伯夫妻、来広、ピカソをご利用になられる
一九三九	昭和十四	画友・山路商、特高に連行される ピカソ画房、反戦思想運動の中心と疑われ 佐渡久士も特高に連行される パブロ・ピカソと交流があるのではないかと疑われ 店名を「広美堂」と変えさせられる
一九四五	昭和二十・八	広島に人類初の原爆投下、終戦



一九四六	昭和二十一	焼野原に四坪のバラックを建てて
一九四七	昭和二十二	大阪文房堂、吉村商店、土井画材、東洋画布等より画材の仕入れを再開 東京への仕入れ方々、神奈川県澤井村に疎開中の藤田嗣治、猪熊弦一郎、萩野康司、中西利雄等の画家を訪問。東京に店舗を出すよう勧められる
一九四八	昭和二十三	松本滝蔵衆議員の立候補を応援し、平沢和重、福島慎太郎氏らと選挙に没頭する
一九四九	昭和二十四	木造二階建店舗を建築 画廊も併設する この頃、南薫造先生来店 「画材店は大きくせず、集まる人を温かく迎え、語り合える、親しみやすい店にし、人々に筆を持ち、描く心を起させような店にしたい」と助言を受ける
一九五〇	昭和二十五	朝鮮戦争勃発
一九六七	昭和四十二・六	有限会社ピカソ画房、法人化
一九六八	昭和四十三・四	山中雪人、ピカソ画廊にて個展
一九七二	昭和四十七	花澤良章、（有）ピカソ画房に入社 佐渡久士、肝炎で倒れる（64歳）





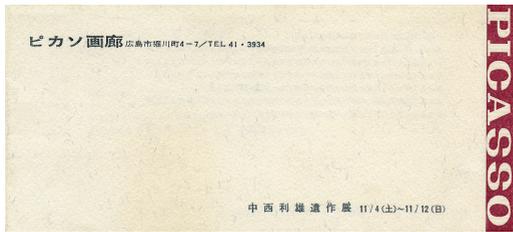
1970(昭和45)年頃のロゴ



現在のロゴ



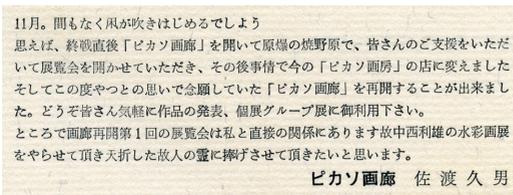
1991(平成3)年10月堀川町本店



中西利雄遺作展  
1967(昭和42)年11月4日～12日  
ピカソ画廊新設開店第1回展のDM



中西利雄遺作展DM裏面



中西利雄遺作展DM中面  
ピカソ画廊新設開店・第1回展  
に寄せた佐渡久士の挨拶文

一九八三	昭和五十八・四	佐渡久士、75歳にて他界 花澤良章・代表取締役に就任
一九八六	昭和六十一	クロマテック事業(デザイン加工業)を土井清志社長の勤めて始める
一九八八	昭和六十三	広島市中区袋町にカスタムフレーム専門店「フレミングショップピカソ」を開業
一九九〇	平成二・六	出力店「ピカソグラフィックスステーション」開業
一九九四	平成六・一	本店、新社屋落成
一九九七	平成九・四	広島市立大学開学、同芸術学部売店を開業
二〇〇一	平成十三・五	フレミング工房として井口店を開業
二〇〇二	平成十四・二	アートスクール・ピカソ塾・井口教室開講
二〇〇六	平成十八・三	ピカソ画廊、創業70年 アートスクール・ピカソ塾・袋町教室開講
二〇〇七	平成十九・十	花澤憲治・代表取締役に就任 花澤良章が会長に就任し、三代目花澤憲治・佐渡真志の兄弟による新体制になる
二〇〇九	平成二十一・二	花澤久子、63歳にて他界 佐渡千鶴子、94歳にて他界 本店4階に小さなピカソ画廊「ギャラリー・パブロ」を新設



26年前（祖父の葬儀の日）広島市山手町にある私の実家には、黒い服を着た人たちが家の中や庭の中、周りの道路にまで溢れかえっていました。

しかし10歳であった私は、ピカソ画房の創業者である祖父（佐渡久士）が永遠の眠りについたことも、こんなに沢山の人たちが家にやってきたことも、あまり理解していませんでした。

私は3年前に、ピカソ画房の二代目の経営者であった父親から、経営を引き継ぎました。

それまでの私は、大学を卒業後社会に出て働き、ピカソ画房に帰ってきて家業を手伝うようになって、平凡な毎日を送っていました。そんな毎日でも9年前に、祖父の第四子であった私の母親が脳梗塞で倒れた頃から変わってきたのです。

今まで母親に頼り切っていたピカソ画房の経営も、私の肩にかかってくるウエイトが重くなってきて、気ままに生きていた私に沢山のことが一気にのしかかってきたのです。

悪戦苦闘しながらなんとかやっていたのですが、3年前に母親が亡くなる頃は本当に押しつぶされそうでした。

その後、母の死も受け入れられるようになって、社会的な経営者としての責任もある程度果たせるようになってきた頃、ピカソ画房の社会の中でのあり方を考えるようになりました。

社会の中に存在している以上、企業には存在理由というものが必要であり、その存在理由を考える為には、創業者の理念を理解する必要があると思います。

こんなことを考えている頃、タイミング良く、創業者・佐渡久士の長女である池田三千恵様から、ピカソ画房の歴史を一冊の本にすること、その原稿を読ませていただきました。

この原稿の中で、ピカソ画房の原点ともいえる祖父の広島の芸術への思いを感じ取ることができたのです。

広島からピカソを創出したい！ 今日、企業は利益を出すことばかりを考えて企業活動を行っています。確かに、利益を出すということは、企業にとって大切なことだと思います。

しかし、利益を出すことだけが企業の全てだとしたら、税金を沢山国に納めることが企業の全てだということになってしまいます。

やはり企業というのは、お客様に、そして社会に何か役に立つことを大きな柱として企業活動を行っていかないと、企業の意義自体が薄れてしまうと思います。

この原稿を読むことによって、祖父の多くの思い、理念、そしてそれを実現させる為の多くの苦勞を感じ

取ることができました。

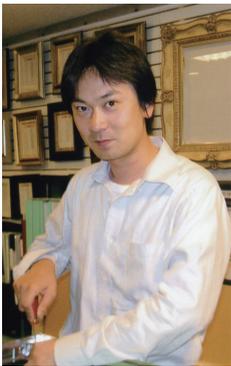
そして、沢山の人に愛された人柄、魅力を感じることができました。

この創業者の思い・理念こそピカソ画房という一企業の中で、紡いでいかなければならない大きな柱です。これからのピカソ画房の歴史をつくっていく私たちにとって、道標となるような本になったのではないかと思います。

最後になりましたが、大変な苦勞をされ本書を執筆された、伯母に尊敬の念をこめて感謝したいと思います。

(第三巻郵便物返却)

新定価 1ヶ月刊 5月3,925円(本体価格3,738円) 創刊3,007円(本体価格2,864円) 1冊売/月刊130円、5冊500円



佐渡 真志



### 3世代の夢 壁に脈々

# 育て広島のピカソ

いい日

広島にピカソを出すのが夢なんじゃ。そんな先代の思いを受け継ぎ、老舗画材店の外壁を芸術家の卵に開放する親子がいる。広島美術界に、三代代で小さな灯をともし続ける。

一日、創業七十六年の広島市中区、ピカソ画房の壁面に、新しい絵が飾られた。市立大芸術学部三年の下谷京平さん(23)の「心と体と絵画」。喜びを隠せない下谷さん「いい作家になって、苦勞の先に道は開けるけん」。画材店の花沢良章会長(66)と長男で社長の高濱さん(39)が声を掛けた。

〇五年、病に伏した妻久子さんを支えたため、高濱さんと次男の良志さん(32)に店を譲った。ウェブサイトでの子どもたち、この十五年間、希望者は引継ぎも切らない。「少しでも広島の美術を応援したい」と思ってた。先代も口癖じゃったと良章さん。唇を震した仁志義父佐渡久男さんに思いを込める。絵描きを目指し、ピカソを敬愛した佐渡さん。三年に「ピカソ画房」を開業したが、戦中で特高寮にマークされ、店名変更を迫られたことも。そして、風爆で店舗兼自宅は焼失。バラック住まいをしながら画材をかき集め、焦土に芸術の灯を点した。

「商売上手ではなかったが、人前美術を愛した義父。良章さんはその背中を見ながら店を守ってきた。二〇

2008年7月 中国新聞夕刊掲載記事と佐渡真志

この小誌を出版する事は、私の中では考えられないことだと思っていました。しかし、私が兄と慕ってやまない和高伸二氏から、「広島美術の為に、一生を捧げた佐渡久士の足跡を、このまま埋もれさせてはいけない」と重ねて言われ、立ち上がることにしました。

戦前のことからなので、何から調べ、どの様に書けば良いのか、どこまでやれるか………。

相談する人も無く、一人悩み、考え、父の元気な時にもっと話を聞いておけばよかったと思いました。「ピカソ画房」の創立から現在に至るまでの変遷を知る人も、今では数少なくなっていました。

幸い母が、戦前の事や私が幼かった頃の事を書き残してくれていたもので、それを参考にし、又各方面の方々の力をお借りして、やっと小誌が出来たと思っています。

創立前後の事から調べていくと、知らない事が多く大変なことでしたが、調べれば調べる程、父の広島美術界における戦前・戦後にわたつての陰の力としての存在の大きかったことを知らされました。

今回私達の知らない部分に接することも多くあり、あらためて「偉大な父だったのだなあ」と感心するとともに感激しています。

戦後65年が経過し、戦前の事はもとより原爆の悲惨な記憶さえ薄れゆく今日、父の残した資料も散逸し

ていた中、まさに手探りの状態で書き記しました。

ただ、芸術家達を愛し、自分自身も絵描きになる事を夢見た父佐渡久士の気概と足跡を、娘として私が元気なうちに、現在三代目社長を継いだ花澤憲治君・佐渡真志君、又現在ピカソ画房と一緒に頑張ってくださいっている社員の皆様に引き継いでもらえたらと思つたのです。

時代が移り行く中で、新しい時代も見据えながら、今後共、父が「何を思い、何を願つたか」を心に留め「ピカソ画房」を皆様から愛され、気軽に話に寄られる店にしていきたいと思ひます。

それから、お客様や共に働いている人達のことを一番に考え、一人でも多くの方々（特に若い人々）の夢に光りを与える手助けをしていってもらえればと思ひます。

広島美術・美術の為に、「ピカソ画房」があつてほしいと願っています。それが、父の大きな願いであつたと思うからです。

この小誌を発刊するに当たり、一緒に考え大きな力を貸して下さい下さった、元ピカソ画房社員小田興治様（父と共に働き、父の意志を継いでピカソ一筋に働いていただきました）、又編集・印刷・製本を担当いただきましたピカソ画房袋町店の伊藤敏文様に、心から感謝申し上げます。

今後共、「広島ピカソ画房」として、地域に根ざした夢のある画材店として発展することを祈りつつ筆を置きたいと思ひます。

小誌作成・発行に携わってくださいました皆様様に、あらためて心より御礼申し上げます。



本店 正面

店舗所在地

- 本店  
〒 730-0033  
広島市中区堀川町 4-7  
TEL082-241-3934
- 袋町店  
〒 730-0036  
広島市中区袋町 4-13  
TEL082-246-8983
- 井口店  
〒 733-0842  
広島市西区井口 5-22-11  
TEL082-278-5163
- 広島市立大学売店  
〒 731-3194  
広島市安佐南区大塚東 3-4-1  
TEL082-848-8295

URL:<http://www.picasso.co.jp/>  
E-mail:[picasso@picasso.co.jp](mailto:picasso@picasso.co.jp)



袋町店外観



本店外観



井口店外観



広島市立大学 売店

主要参考文献・写真

- ピカン画房・池田三千恵・小田興治所蔵アルバム
- 「広島美術の系譜（戦前の作品を中心に）」広島市現代美術館 1991年
- 「広島県立美術館コレクション選」広島県立美術館 1996年
- 「中西利雄展」田辺市立美術館・神戸市立小磯記念美術館 2004年
- 「中西利雄展」（新しい水絵を求めて）呉市立美術館・愛媛県立美術館・姫路市立美術館・梅田近代美術館 1984年
- 「高村光太郎・智恵子―その造型世界」展図録 呉市立美術館・三重県立美術館・茨城県立近代美術館・美術館連絡協議会 読売新聞社 1990年
- 「日本の異彩三人展―福田恵一・猪原大華・和高節二―」広島市現代美術館 2002年
- 「私の履歴書 猪熊弦一郎」丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・財団法人ミモカ美術振興財団 2003年
- 「SI機関土画家 太田忠 遺作展図録」広島県立美術館 1979年
- 「生涯100年記念 南 薫造 展図録」広島県立美術館 1983年
- 「画業60年 武永楨雄」武永楨雄展実行委員会 1986年
- 「画業50年・仏陀伝想 山中雪人展」東京展・毎日新聞社 広島展・中国新聞社 1992年
- 「清原定謙遺作集」ホルベイン工業・ホルベイン画材・ホルベイン画布 1982年
- 「和高節二里帰り展」パンフレット 和高節二 2001年・2003年
- 「三岸好太郎常設展」パンフレット 北海道立三岸好太郎美術館 2002年

著者プロフィール

池田 三千恵 いけだ・みちえ



1936 (昭和 11) 年 4 月広島市生まれ  
広島大学付属高等学校卒  
女子美術大学短期大学部卒  
多摩美術大学日本画終了  
現在 八王子市在住

著者近影 本店にて

広島の芸術家の為に夢をいだいた人生

ピカソ画房 佐渡 久士

発行日 平成21(2009)年 8月15日 限定100部  
著者 池田 三千恵  
編集 ピカソ画房 袋町店 伊藤敏文  
発行・印刷 ピカソ画房  
製本 ピカソ画房

〒730-0033広島市中区堀川町4-7  
非売品

編集後記

昨年10月、池田様より出版のご相談を受けてより早10ヶ月、この度やっと刊行の運びとなりました。その間、池田様には東京の八王子から何度も広島に来ていただき、資料調べや打ち合わせを致しました。

当初はどうなる事かと思っておりましたが、過去の資料等を当たる毎に佐渡久士の広島美術の系譜に於ける影の力を、ひしひしと感じる編集作業となりました。

大正デモクラシーから一転、軍国主義の淵に沈む社会の中で、戦前の日本の美術界は、海外から多様な潮流を取り込んで目まぐるしく躍動しました。

そのような中、自ら画家を志した佐渡久士が、画材店を起業してからの75年の生涯に於ける画家や文化人との交流や、その人脈の豊富さには驚いてしまいます。

特に戦前の広島洋画壇に於ける役割は、大きかったと思われれます。小誌はそんな佐渡久士の、広島美術振興に捧げた一生を、長女池田三千恵様が根気強く記憶を辿って書かれました。

昔の事を書き記して、何の役に立つものでも無いかもしれませんが。戦中・戦後の時代背景を知らずして佐渡久士の喜びや苦悩は理解し得ないかもしれません。

しかし、絵に対する夢や情熱は、今を生きる私達にも十分伝わる本になったと思っております。

又、ピカソ画房社史として、創業者の生き様を伝える一助になればと願いつつ編集作業を終了致しました。

ピカソ画房社員として、このような本の編集に携わる機会を与えていただいた池田様に、心から感謝申し上げます。

伊藤敏文

